

きっと夢の案内人たち

くまたろうさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夢や目標なんて気づいたら出来るものだと思っていた。

そう思いながら、今まで生きてきた。これからもずっと。

「私、見たいんです。輝きの向こう側。お姉ちゃんたちほどの力は今はないけれど、いつかみんなをそこに連れて行ってあげられるようなトレーナーになりたいんです！」

この物語は、夢を持たない大学生相沢祐介と、とあるアイドル事務所の駆け出しトレーナー青木慶の物語。

※前作よりの世界観引継ぎ、他マス越境、各キャラオリジナル設定等ございます。

目次

置いてけぼりの一人	1
きつかけの隣人	14
そして役者は舞台に上がる	29
初出勤とウサミン星人	42
波打ち際の灰被姫	58
暗雲照らす太陽の君は	71
誰かのための何か	83
焦がれる歌姫の偶像	98
魔法使いは魅せられて	116
憧れの囚われ人	131

置いてけぼりの一人

友人の増田が最近バイトを始めたらしい。らしい、というのも俺は本人から直接聞いただけで増田自身が働いているところを実際に見た訳ではないからだ。

なぜ友人の発言をまるで戯言のように扱っているのかというと、それはあいつの日頃の行いのせいだろう。大学の課題はほったらかし、1限どころか2限にすら顔を出さないこともある、そして何より普段の本人自身から漂うだらしなさ。

入学式後のオリエンテーションの時から何となくの付き合いで仲良くしているものの、俺自身あいつが良き友かというところに関しては間違いなく「ノー」と答えるだろう。

そんなあいつがだ、「最近バイトを始めた」何て言いだすもんだから「はいそうですか」と信頼するのも中々に酷な話である。

そういうえば俺は以前どうして大学3年の6月になって今更バイトを始めたのかと尋ねたことがあった。

「あー、そりゃ、最近金がないんだよ」

次の時間のマクロ経済の課題を必死に書き写しながら、増田はいつものあつけらかなとした様子でそう答えた。

仮にも俺の課題を写してるんだからせめて一言詫びくらい入れてくれてもいいのではないか。

「新しいギターか？」

「うんにゃ。俺の相棒はあれで充分」

増田は大学の軽音楽部に所属している。たまに小さな箱を借りてライブなんかも行っているみたいだ。以前一度誘われて行ったことがあるがギター片手にステージの真ん中で歌う増田はなかなかにかっこよかった。

「それじゃあ今度も旅か？」

俺はそんなステージの上の増田と今目の前で課題を前に四苦八苦している増田とのギャップに若干戸惑いつつも冗談交じりでそう口にする。

こいつは以前唐突に旅に出ると言い放ち大学2年の夏休み中一切連絡が取れなかったことがあった。その間増田が何をしてたのかというところを当てもなくただ金の持つままに動き続け、悠々自適な放浪の日々を送っていたということを休み明けも2週が過ぎようとしていた必修科目の冒頭で聞いたことを覚えている。

「じゃなかったらあれだ、女だろ女」

「女……。女っっちゃ女なのかなあ……」

「なんかはつきりしない言い方だな」

「ん〜いや、多分相沢は勘違いしてそうだから言うけど別に夜のお店とかそういうのじゃないぞ」

くると器用にシャーペンを手先で持て余しながら増田は左手でスマホを弄り始める。いいからはよ課題をやれ。

「3限まであとちよつとしかないぞ」

「んー、わあつてるよ」

「で、その女つてのは？」

「お前こういうの馬鹿にしない？」

「聞いてねえんだから馬鹿にしようがないだろ」

「そうか……」

そういうと増田は一呼吸空けて静かに答えた。

「青春にな、会ったんだよ」

友人が危ない薬に手を出した時にはどこに相談に行けばいいんだろうか。

「増田、クスリはやめた方がいい」

「ほら馬鹿にした！」

「詳しいことがわかんねえんだからこういうしかないだろ！」

「……お前さ、夢とかある？」

ふと、増田が真剣な声でそう呟いた。どういう意図での発言なのか探ろうと表情を覗き込むものの、その真つすぐなまなざしは半分ほどしか進んでいない空白だらけの課題を静かに見つめているため目すら合わすことができそうもない。

「相沢、俺たちももう大学3年だぞ。夢なんて甘つちよろいことは言わんけどさ、やりた
いこと、進みたい方向ぐらいいはしっかり考えといた方が良いぞ」

人に課題を写させてもらっておいて何を偉そうにと言いたいところだが、増田の言葉は鋭く俺の心に深く突き刺さってその言葉を心の中へと縫い留めてしまう。

「夢」

増田はちやらんぼらんとしている割にたまに確信を突く言葉を口にするところがある。本人は意図していないつもりでも言葉を交わした人間の心にいつまでも残るようなフレーズ。

「ま、悩むのも若さってもんだな！ 悩めよ少年。あ、課題は後は自分でやるから先行くわー！」

「ちよ、待てって！ ってか若さってお前も同い年だろ！」

まるで洋画の陽気な黒人男性のように後ろ手に手を振りながら増田はその場を後に

する。その後結局俺は増田がなぜバイトを始めたのかの理由を聞くことが出来なかった。そして増田のマクロ経済の課題は提出されることはなかった。

「あちい……」

結局増田のバイトの理由は聞けぬまま、スマホの画面に表示されるデジタル時計は7月も終わりを告げようとしていた。

前期最後の試験を終えた俺は増田とどこか昼飯でも食いに行こうと思いい奴に連絡を取ったものの「わりい、この後シフト」の一言で足蹴にされてしまい、多数の学生が行き交う食堂の一角で一人寂しく昼食を味わっているのだった。

「シフトなあ……」

結局、増田のバイトのきっかけについてあいつと親しい数人の友人に尋ねてみたものの、「相沢が知らないものは知らない」の一点張りで何の情報も得ることが出来なかった。

かくなるうちは俺並みにあいつと親しいか、またはそれ以上の交友があるであろう人間に連絡を取るしかない。

「軽音部なあ……」

スマホから連絡先を素早く開いた俺は増田と同じバンドに所属する高崎の名前を探
す。この時間だとあいつは……。

「おう、相沢じゃねえか。こんなところでポッチ飯とは寂しいな」

ふと、肩越しに声を掛けられ慌ててスマホから目を離しそちらを振り向く。

「た、高崎……。ポッチ飯ってなあ。見たところお前も一人じゃねえか」

「まー、残念ながらそれはそうなんだけど」

俺の視線の先には短髪長身、スポーツマンシップの擬人化を思わせる風貌の人物が
立っている。いかにも体育会系の人間を思わせるが、彼は増田のバンドメンバー。ちよ
うど俺が連絡を取ろうと思っていた人間だ。

「それよりもちようどよかった。聞きたいことがあったんだよ」

「あー、それよりも先に飯、取ってきていい？」

「あ、ああ、わりい」

学食の券売機で買ったであろう食券をひらひらとさせながら高崎は男でも惹き込
めそうな爽やかな笑顔で笑った。

「で、聞きたいことってなんだ？」

昼食の学食限定スタミナカツ丼に齧り付きながら高崎は先ほど俺が口にした話題に
ついて尋ねてきた。

「増田って最近バイトしてんの？」

「増田？ああ。ってか相沢知らなかったの？」

「先ほど昼食は食べ終えたというのに高崎のその食べっぷりを見てると何か口にしなくなってくる。これも一種の才能って奴なんだろうか。」

「いや、バイトしてんのは知ってたんだけどさ、理由とか知らねえんだよな。金が無いとか言ってたけど何に使ってんのか知らねえし。あれじゃん。ヤバイ宗教とかネットワー
クビジネスとかだったら止めてやるのが友人つてもんじやん」

「あー、その様子だとマジで知らねえんだよ」

「で、結局あいつ今何にお熱なんだよ」

「口いっぱいにかツ丼を含んだ高崎は箸を持たない方の手で俺の言葉を制するように
手をこちらに伸ばす。」

「飯ぐらいゆつくり食わせろ」

「わ、わりい……」

「で、バイトの話だったな」

「高崎が口元を拭いながら食堂に設置されている給水器から汲んできたであろう水を
目一杯に口に含んだのをただ茫然と眺める。」

「あー、その前に、ちょうど話題になりそうなのが……」

そんな時だった。高崎の視線が食堂の入口へと向かう。

「彼女知ってる？」

高崎の言葉と共に入り口付近の男連中が若干のざわめきを覚える。

そこに居たのは黒髪的美少女。大学生というには若干の幼さを纏っているもののTシャツの袖からスラリと伸びる両手は健康的な色白さを魅せている。

おそらく友人であろう他の女の子達と楽しそうに会話をしながらこちらに歩いてきているが、それがなからうとおいそれとあれに声を掛けることのできる勇気がある男がこの時代に居るのなら出てきて欲しい。

こちらへ歩いてくる途中、一瞬だけ目があったような気がしたもののそれは悲しきかな男の勘違いという奴であるのが世の常であんな美少女と今後どこかでお近づきにすることはこの先の人生残念ながらミミリもあり得ないのだろう。

「悲しい人生だな、俺」

「お前が何を悟ったのかは知らねえけどまあ話題のきつかけぐらいにはなるだろう」

「きつかけってなあ、俺が知りたいのはあんな可愛い子の話じゃなくて増田のバイトの」
「はあ……」

これだからポツチ飯野郎はとでも言いたげな表情で溜息をつく高崎。言わせてもらうがポツチ飯になりかけてたのはお前も一緒だからな。

「あの子な、スポーツ学部の2年生」

「詳しいな。なんか怖いわ」

「はっはっは、そんな褒めるな」

「引いてんだよ。で、あの子が何だってんだよ」

「なんか346プロで働いているらしいって聞いたぞ」

346プロ。俺の日常会話じゃ中々に耳にしないワードが高崎の口から聞こえてきた。

「346ってあの芸能事務所の？」

「そそ。で、そこで働いてるらしいよ」

なるほど、あのルックスなら確かに芸能人つても納得だ。

「モデルかなんかか？」

「うんにゃ」

違うのか。そうなるに従業員としてってことか？

「事務のバイトかなんかってことか？」

「ちやうちやう。何でもアイドル部門のトレーナーとか。ほら、スポーツ科学部だろ。それつながらでいろいろ勉強してるんじゃない？」

「アイドル部門？」

ってことはモデル部門とかアーティスト部門とか他にもあるのか。

「なるほどねえ。勉強熱心でいいことじゃないか」

彼女なりの夢や目標があるってことか……。俺より年下なのにちゃんとしていて何と言うか、羨ましい。

「まあな」

「で、それが増田の話とどう繋がるんだよ」

「最近あいつアイドルにお熱なんだよ。チケット買ったりCD買ったりグッズ買ったりで忙しいらしいぞ」

「あ、あいどる? あいつが!？」

ちよつと予想の斜め上過ぎる解答すぎませんか高崎さん。

「まー、それ関連で金がねえつてのが理由なんだろうな」

「な、なるほどなあ……」

それにしても全く予想外の話もあったもんだ。

「きつかけとか聞いてねえの?」

「んー増田の奴なんて言ってたっけなあ。確か渋谷か新宿のイベントで一緒になったどっかのボーカルが今はそこでアイドルやってるんだと。それきつかけだったっけなあ。確か名前が木村……なんだっけ」

俺は先ほどから机の上で寂しそうにしているスマホに手を伸ばす。検索は「346プロック アイドル」ってところだろうか。

「多田……りいな？」

「ん、その子じゃないぞ。なんかリーゼントが似合うカッコいい系のお姉ちゃん」

リーゼント……。この子か、木村夏樹。なるほど、元ロックバンドのボーカルか。つてか髪下ろした時の画像もあるけどどっちもイケメンだな。

「この子のファンなのか？」

「どうだろう。今はその子とユニット組んでる別の子を応援してるとか言ってた気もするけど……」

「この時期にそんなことにお熱で大丈夫なのかよ。そろそろ俺らも就活とか考えなきゃいけない時期だろ？ 授業で一緒に奴らもインターンの話とかしてたしさ」

「それについては何と言うか……」

先ほどまで楽しそうに会話をしていた高崎の顔が一瞬曇った。

「どうしたんだよ」

「増田の奴な、どうも音楽で食っていくつもりらしい」

高崎の言葉がいまいち理解できなかった。別に意味が分からなかったわけじゃない。そこに至る理由が理解できなかっただけだ。

「……マジで言ってるのかそれ」

「ああ、あいつは本気らしいぜ。あいつどこでバイトしてるか知ってるか？」

「確か、渋谷のライブハウスって……。もしかしてそういうことか？」

「凶星だ」

恐らくそういう場所でコネでも作ろうっていう魂胆なんだろうか。いや、別にあいつのやりたいことに否定的な訳じゃない。夢に向かつて頑張る人間は立派だと思う。

ただ、自分がそうなれないのが怖いだけだ。

住み慣れた部屋がやけに広く感じるのは、きつと昼間の会話のせいだろうか。

地元から東京に出てきて2年と4か月が過ぎようとしていた。ただ日々を惰性で過ごしていた自分が何かを見つけれられるんじゃないか、そう考えて地元を離れて過ごした日々。

希望を胸に明るい未来を語る友人たちを尻目に、何も無い自分が何かになれるんじゃないかとそれなりに足掻いてきたつもりだ。

それなのに……。自分だけが何も無い。まるで自分だけが世界に置いていかれるよ

うな気分だ。

「怖い……なあ。何を今更」

部屋に響くのは俺の独り言とただ静かに時を刻む壁掛け時計の針の音だけ。

昼間抱いた感情が胸にこびり付いて落ちやしない。自分の夢に向かつて歩き出す友人の話聞いて怖いなんて感情を抱く日が来るとは思っても居なかつたからだ。

増田のことは応援してやりたいと思う。ただ、それに嫉妬してしまう惨めな自分が居るのも現実だ。俺には何も無い。あいつみたいな行動力も、夢も、希望も。

そう思っていた。これからもずっと、そう思いながら生きていくんだと思っていた。彼女に、そして彼女たちに出会うまでは。

この物語はそんな俺が、相沢祐介が夢に手を伸ばすまでの物語。

きつかけの隣人

時間というのはあまりにも残酷なもので、当人がどんなに拒否しようが無理くりにもその存在を明確に突きつけてくる。欲しくなくても押し付けられて、抗えない現実を見せつけてくるのだ。

カツコつけて小難しく言葉にしたものの、結局俺が何を言いたいのかという目目の壇上で偉そうにご高説を垂れ流しているどこぞの就職支援会社の担当社員の言葉を受け入れたくない自分が居るだけだ。

「ビジョンがどうか、自分への適性がどうか簡単に言ってくれるよな」
「ん？あ、ああ……」

1000人以上がぎちぎちに詰め込まれている大学内の大ホール。その一角で俺の親友である増田はスマホを片手に俺の言葉にそっけない返事を返してくる。

「聞いてんのかよ……」
「話半分な。結局向こうもこういうこと喋ってくれていうの大学に頼まれてるだけだろう？俺たちのことなんてちっとも考えちゃいないさ。向こうは金が貰えて大学は就

職率が上がる。お互いWin—Winって訳よ」

「そんな夢も希望もないことを……」

「実際さ」

俺の言葉に思うところがあつたのか先ほどまで長方形の電子機器の上で忙しく動き回っていた増田の手がピタリと止まった。

「夢とか希望とかこういうの明確に持つてる奴つてここに何人いるんだろうな……」

ほんの一瞬だけ、増田の顔に陰りが浮かぶ。その表情がどこまでも寂しそうに見えたことがやけに印象に残った。普段は明るくて陽気な奴だからそんな表情をされると若干困惑を覚える。

「ま、なるようになるさ」

「なるようになるつて、簡単に言ってくれるじゃねえかよ……」

「そうか？じゃあ一個付け加えとくか」

「何を……」

その時だった。周りが一齐にざわめきだす。どうやら俺たちの貴重な1時間半を奪っていった就職セミナーが終わつたようだ。途中から話なんて聞いちゃいなかったせいで終わったことに気づかなかつたようだ。

気づけば増田もいつの間にか席を立てっており入り口の方へと向かおうとしている。

「行きたい方向へと向かい続ける限り、なるようになるさ。じゃ、バイトだから！」

それだけ言い残すと増田の姿は一斉に出口の方へと向かっていく学生の波に飲まれていった。

……また一人で飯になるじゃねえかよ。

就職セミナーを終えたその日の午後、相変わらず増田にフラれてしまった俺は一人寂しく大学最寄のファストフード店で昼食を済ませると近くの公園へと足を向けていた。

公園と言っても街中にあるような小さな公園ではなく、この公園は元々市民の憩いの場を提供するという目的の元区によって作られたものらしく、かなりの規模を誇っている。

大型のアスレチック施設だけではなく、多種多様な花が咲き乱れる花壇、そして大規模な野外イベントが開催できるほどの広場が存在している。

俺の自宅からもそこそこ近く、他にやることも無かった俺はこの公園へと徐に足を運んでいた。現在時刻は土曜日の午後2時を回ろうかというところ。休日ということもあって多くの人々の声が聞こえてくる。犬を連れ来た人、家族連れ、ランニングコースを黙々と走る人。ここには沢山の人々の生活が入り乱れている。現に広場近くのベンチ

に座っている俺の真横にも、何やらメモ帳を片手にどこかと電話をしているスーツ姿の若い男の人が忙しなく手を動かしながら電話越しの相手と言葉を交わしていた。

「……はい、ええ、引き続きよろしくお願いいたします。それでは失礼いたします」

「……」

若干痩せこけた頬が気になるもの、全体的に爽やかな雰囲気纏うその男性が気になってつい視線がそちらに行ってしまう。

「……どうかしましたか？」

つといけない。どうやら視線がそちらに言っていたのがバレていたようでその男性は俺へと声を掛けてきた。

「もしかして、電話の声お邪魔だったでしょうか？」

「あーいえ、そんなことは決して。こちら不躰な視線を飛ばしてしまつてすみません」
「そんな謝られることは……」

こちらの方が失礼なことをしたというのにその男性は丁寧に俺に謝罪の言葉を口にした。

「外回りの休憩中ですか？お互い大変ですね」

苦笑いしながら男性は先ほどまで取っ散らかっていた道具をカバンへと仕舞い込む。外回りつてどういふことだ……？

「あ、あー」

なぜ男性がそんな言葉を口にしたんだろうと疑問に思ったが自分の足元に視線を送るとすぐにその問題は解決した。就職セミナーはなぜかスーツ着用で来るようにと大
学からの指示があつたため、今日はスーツ姿で大学に行ったのだった。そのスーツ姿を
見て男性はそう勘違いしたのでだろう。

「すみません、自分まだ学生なんです」

「あ、学生!?ごめんごめん!」

スーツの男性は俺が学生だと知って砕けた態度で笑った。

「ごめんね堅苦しくて」

「いえ、気にしてないので大丈夫です」

「そっかー学生かあ。スーツってことはあれかい、就活とかかい?」

「ええ、今日はセミナーで……」

「つてことは3年?」

「はい」

なんだこの人、急に馴れ馴れしいな。

「やりたいこととかあんの?」

やりたいこと……。きつと彼は会話のきつかけにでもと口にしたんだろうけど生憎

とその話題には余り触れて欲しくなかったところだ。

こういうときは適当にごまかすのが筋つてもんならうけど……。

ふと男性と目が合う。なんでそんなワクワクした目で俺を見ているんだろう。

「それが……何もなくて」

その目がやけに印象的で俺は気づかぬうちにポロリと本音が零れてしまっていた。

「あ、いや、えつと今のは……」

「……気にすることじゃないさ。目標がある人間は往々にしてそれを声に出しているもんだから目立つつてももの。だから周りにたくさんいるように見えるけど、その実本当にやりたいことが明確な人間つてのはそう多くはないさ。周りに、そして自分に騙し騙しの誤魔化しを精一杯に押し付けながら生きてるもの。さっきの君みたいにな」

……何なんだこの人。俺が適当なことを口にしようとしていたのも見抜かれているし。

「君は運がいい」

唐突に男性は立ち上がると空を見上げながらそう口にした。

「運がいいって……どういうことですか？」

「この後この広場でイベントやるんだ。よかったら見に来てくれ」

「……イベント？」

「そういえば普段はただただむき出しになっている石のステージが今日はやたらと鮮やかに飾り付けられている。」

「……えっと、イベントって」

「まあ、みりや分かるさ。それじゃ俺はまだ仕事があるから。そういえば、喫煙所ってどこだっけ？」

「……広場の真ん中の道を東側に抜けて少し歩いたら右手にあります」

事態が上手く呑み込めないまま俺はただ漠然と口を開く。

「ありがとう。なんか君とはまた会えそうな気がするよ。それじゃあ！」

それだけ言い残すと彼は去っていく。気づけばここに座ってから20分以上も過ぎている。また会えそうな気がするって……男の人に言われてもねえ。

それにしてもイベントかあ。まあ時間もあるし見て行くぐらいなら……。ってかさっきの人、そういう宣伝をしてくるってことは区の広報課の人だったりしたんだろうか。

俺が先ほどの会話を何となく思い返そうとしていたその時だった。突然目の前から男性の声がかかった。

「あーここにいらしたんですか！ すいません、ちょっと確認したいことがあって急いで来てもらえますか!？」

いや、突然なんだこの人。なんか思いつきりSTUFFって書かれてるTシャツ着てますけど……。

「えっと、自分は……」

「すみません急ぎなんです！お願いします！」

「え、あ、その……」

いやいやいや、完全に人違いですよね!?ってこの人、力強いなっ！

「行きます行きます！だから無理やり引つ張らないでくださいっ！」

半ば強引にどこかへ連れていかれる俺。いや、これ拉致だよ拉致。

「……………あの」

気づけば俺は先ほどまで眺めていたステージの袖に居た。いや、なんでだよ。

「えっと……」

仮設のテントを幕で仕切った仮の控室のような空間。その中でカラフルな柔らかい色の衣装に身を包んだ女性が俺と俺を連行した恐らくイベントのスタッフさんの顔を交互に見回しながら戸惑いの表情を浮かべている。

「あの、何がどうなって……」

「それはこつちが聞きたいよ……」

蜂蜜色の甘い髪を左右に小さく揺らしながら不安そうな表情をこちらへと向けてい

るものの残念ながら俺にはその不安を拭ってあげることは出来そうにない。

「えっと、相葉夕美です……」

どうにか状況を打開しようと捻った末にどうやら彼女は自分の名前を名乗ったようだ。

「ご丁寧にも。相沢祐介です」

「それで、相沢さんはどうしてこちらに……」

「いや、なんかTシャツ着たスタッフさんに……っっていねえ」

気づけば先ほど俺を拉致ったスタッフさんの姿はもうそこにはなく、ステージ逆側の何やら機材が置かれているテントの方にその姿が見えた。

「えっと、相葉さんは今日のイベントの出演者かなんかなの？」

なんとかか目の前に置かれている状況を必死に整理しようとする俺。

「はい、346プロの新人アイドルなんです。なんでも確認したいことがあるとかでプロデューサーさんを探していたらしいんですけど……」

346プロ？最近名前を聞いたばかりだなあ。

「プロデューサーさんっていうと君の？」

「はい……でも、そこに姿を現したのが相沢さんで……」

なるほど、それで俺はさっきのスタッフさんに件のプロデューサーさんと間違われた

訳か……。

しかしこんな若造と間違われるかね、そのプロデューサーさんもさあ。

「えっと、私不安で……」

新人アイドルだと本人も口にしていた。俺らが想像するようなアイドルのステージとは天と地ほどの差だろうが、この小さなステージだって彼女にとっては大きな舞台だ。その気持ちも分からなくはないけれど……。

「ここに来たのは相葉さんとプロデューサーさんだけ？」

俺は他に付き添いのスタッフが居ないか尋ねてみる。もしいるようであればその人に連絡を取ってもらえばいいだけだしな。

「えっと、けいちや、じゃなくて、うちのトレーナーさんが一人一緒なんですけど、彼女もプロデューサーさんを探しに外に出ていて……」

「なるほどなあ」

そんな時だった。唐突にテントを仕切っていた幕の間から誰かが飛び込んできた。

「夕美ちゃん、プロデューサーさん見つかった！今スタッフさんの方に行ってもらつて……どちら様です？」

現れたのは黒髪の美少女。恐らく会社のTシャツなんだろう。胸に入った緑色のラインが印象的だ。それに身を包んだ彼女はこちらをパチクリ見つめながら戸惑いの表

情を浮かべている。そりやイベント前の控室に知らん奴がいたらそうなるだろうな。

「えっと、俺は……」

自分の名前を名乗ろうと俺が口を開きかけたその時だった。先ほど俺を連行したスタッフさんとは別の同じTシャツを着たスタッフさんが現れる。

「本番3分前ですー！それと、プロデューサーさんが音出しの補助につくみたいなのでこっちは来れないそうです。青木さんによろしくとだけ伝言受け取ってます」

それだけ言い残すとその場を去っていくスタッフさん。いや、なんかグダグダすぎませんか……。

「あの人のイベントは毎回こうらしいっていうのはお姉ちゃんから聞いていたけど……私によろしくって私は何をすればいいの……」

気づけば先ほど入ってきた少女は付設の机の上に突っ伏してなにやらぐちぐちと呟いている。

「えっと、慶ちゃん……私……」

「あ、夕美ちゃん。大丈夫、今日までしつかりレッスんしてきたし、頑張ってきたんでしよう？」

どうやら二人はだいぶ仲が良いみたいだ。お互いにぎゅっと両手を握り合って相葉さんは慶ちゃんと名前を呼んだ少女の手をしつかりと握り返している。

でも、その表情からは不安の色が取れていない。

「レッスン……。うん、わたし、アイドルだから……」

声の震えが取れていない。そりや不安だろう。でも、アイドルか……。なんだか、眩しいな。でも、今は夢追う人間にその表情は似合わない。

「相葉さん……」

気づかないうちに俺は彼女の名前を呼んでいた。

「俺は舞台上に立った経験とかそういうのはないから偉そうなことは言えないけどさ、君がここに居る理由があるんじゃないかな」

何を偉そうに。俺には自分がなりたいものになる理由どころか何になりたいかすらわかってないのに。

「私が……ここに居る理由」

増田に抱いた感情は嫉妬だった。あいつが、夢を追うあいつがただ羨ましかった。でも今は、なんとなく夢追う彼女の力になりたいと思っっている自分が居る。

「私は……自分が誰かに咲かせてもらえるって。そういうワクワクに出会いたくて……」

咲かせてもらえる……。なるほど、彼女の今日の華やかな衣装の理由はそれか。

「ステージの上なら、きつと咲けるんじゃないかな。だから、不安に思うことはないさ。」

楽しんでおいで、奇麗に咲くことを」

「……うんっ！ありがとうございます！」

彼女の顔から不安と緊張の色がふっと消えていくのが分かった。お礼を言われるような筋合いはないけれど、俺に向けられた花のように咲くその笑顔は誰が見ても心惹きつけられるような魅力的な笑顔だった。

「それじゃあ本番行きます！」

会場にイントロが響き渡る。これが彼女の曲か。

「じゃあ、行つてきます！」

「ああ、相葉さんがステージの上で咲く瞬間をここでしつかり見届けてるよ」

「はいっ！」

ステージ袖から勢いよく駆け出していく相葉さん。先ほどまでの様子が嘘みたいとその足取りは軽やかだった。

「……ポエマーですね」

ふと隣で声がして慌てて俺はそちらを振り向く。気づけば先ほどの少女が隣に居た。

「ありがとうございます。夕美ちゃんを励ましてくれて。私にはその、難しく……」

「彼女にとつては君が握った手も何よりも心強かったはずだと思うけどな」

「そうですかね……」

二人で見つめるステージの上。そこには一輪の花がめいっばいに咲き誇っている。

「青木慶と申します」

彼女が隣で小さな声で名前を名乗った。

「相沢祐介です」

俺もそれに合わせて自分の名前を名乗る。ふと彼女と目が合う。可憐な見た目に似合わないほどの力強い視線。そうか、彼女も夢を追う人の目をしているのか。先ほど抱いた感情が再び湧き上がる。羨ましい……憧れるな。

彼女の視線は今も俺の方ではなくステージの相葉さんへと向けられている。友人を見つめる視線とはちよつと違う、その視線の意味を俺は理解することが出来るのだろうか。ほんのちよつとだけ青木さんの心情に近づきたくなって……つてあれ。俺なんかこの子見たことあるな。

「あのさ、つかぬことを聞くんだけけど」

「はい、なんででしょうか？」

彼女の視線が再びこちらに向かう。

「俺、東中央大学経済学部の3年なんだけどもしかして……」

「東中央大学スポーツ学部2年です」

蘇るのは先日の食堂での出来事。なるほど、この子あの時見かけたあの子だ。

「えっと、よろしくね」

「よろしくお願ひします、先輩……？」

それが俺と青木慶のセカンドコンタクト。そして俺が変わる「きっかけ」の出来事だったのかもしれない。

そして役者は舞台上がる

「いきなり呼び出したりして悪かったね」

とある平日の午後、午前中の講義を終えた俺は沢山の人々が行き交うカフェの一角で差し出されたコーヒーを前に戸惑いの表情を浮かべていた。

「いい、いえ。別に大した用事なんてありませんでしたし……」

「そうか、それなら何よりだ」

二人掛けのテーブル、その向こう側で自らの分のコーヒーカップに静かに口を付ける男性を見ながら俺はなぜこんなことになっているのかの原因となつた数日前の出来事を思い浮かべていた。

「そういえば、この前はありがとう」

「そんな、自分は大したことはしてませんよ」

口につけたコーヒーは自分にはちよつとほろ苦い。だからといってテーブルに備え付けられているシュガーポットの蓋を開けるのは俺のちよつとした見栄が許してくれなかつた。

それは緊張して手が震えそうなのがバレないでいたいという気持ち故か、目の前のスーツに身を包んだ男性に少しでもオトナっぽく見られたいという子どもっぽい思い故か。

「あれから夕美もなんか吹っ切れたみたいでな。表情が明るくなつたよ。俺は詳細は聞いてないけど何やら君が声を掛けてくれたらしいじゃないか」

「あれぐらいしか出来ませんでした……」

思い返すのは数日前の公園での出来事。アイドルの舞台袖なんていう一生で一度も縁がなさそうな場所にスタッフのミスでたまたま足を踏み入れた俺はそこで新人アイドル相葉夕美に出会った。

夢を追う姿、その姿の力に少しでもなりたくて、思ってもいないような言葉が口から出てしまったことは記憶に新しい。というか鮮明に脳裏にこびり付いている。

「どうだった、夕美のステージは」

カップを机の上に乗せながら期待に満ち満ちた顔でこちらを見つめる男性。俺の答えなんて見透かしているだろうに何を今更。

「……素敵なステージだったと思います」

これは隠すことない俺の本心。今更こんなところで本音を偽ったところで当の目の前の男の人には綺麗さっぱり見抜かれているに違いない。

俺の答えはほんの少しの憧れと、そしてそれ以外を埋め尽くす諦めの気持ちで埋め尽くされていた。

「うん、俺の思ってた通りだ」

「どういうことですか？」

彼の言葉の意味が分からずに思わずその言葉の意味を尋ねる。

「いや、君と最初に出会ったときに別れ際に言っただろう？」

別れ際……？ 確か最初に会ったのは俺が公園のベンチに座っているときで、そしてそのあとちよつとだけ言葉を交わして、喫煙所の場所聞かれて、それで……。

「君とはまた会えそうな気がする。さすが俺の勘もまだまだ捨てたもんじゃないね」

「あ……」

あの時はさっぱり意味が分からなかったけど、俺とこうしてまた会う気がしていたってことなのか。

実際そうなるってはいえるんだろうけどそれが勘だっていうから恐ろしい。あんな初対面のちよつと言葉を交わしただけの男にそんな思いを抱くのだろうか。もしそうなのならこの人は占い師か霊能力者だ。

「予知能力でもあるんですか？」

まあ、勘ってというのは往々にして何かの経験や知識に基づいて推測されるものなんて

話も聞いたことがあるしもしそうなのならこの人は過去に俺みたいな男に会ったことがあるんだろうか。

もしそうなのならばその人物は今どんな風に生活しているのか若干気になる。

「あの、勘つて具体的に理由とかはあるんでしょうか？」

「理由？」

俺の質問に男性はしばし思案の表情を浮かべている。もしかして俺に似た誰かのことを思い返していたりしてね。

「そうだなあ、それに関しては直感としか……」

「直感……」

何と曖昧な……そんなもので人を振り回さないで、じゃないな。今日ここに足を運んだのは俺だ。振り回されるつもりはないけれど、そのどうしようもない感情に背中を押されたのは間違いない。

「業界的に言うなら……ティンと来たって奴なんだろうな。たまにあるよ」

照れくさそうに笑う彼を俺は何とも言えない感情で見つめるしかなかった。この気持ちは期待なんだろうか、不安なんだろうか。

「ま、それじゃあ今後の話でもしようか。改めてよろしく頼むよ相沢君」

「はい、よろしくお願ひします。山上プロデューサー」

「めんどくさいからさん付けでいいよ」

「じゃあ、山上さん」

山上さんが伸ばしてきた手をこちらもがっちり握り合う。さて、俺がそろそろここがどこで誰と言葉を交わしているかを改めて整理しよう。

ここは346プロダクションの建物内の一角にある社員用のカフェ。そして目の前ですごい力強くこちらの手を握り返してくる男性は山上プロデューサー。346プロダクションの社員でこの前会った夕美ちゃんをはじめ複数のアイドルを担当しているらしい。

さて、なぜこんな奇妙な状況が生まれたのかというと、この前の公園ライブの直後まで時間は遡ることになる。

花が咲いた。その舞台の上の光景を短く一言で表現するのならばまさにその言葉がぴったりだろう。そう思えるほどに彼女のステージはキラキラと輝いていた。

「どうでした、私の舞台！」

ステージが終わった直後、ステージ袖の控室でただただその光景を見つめていただけた俺の元に相葉さんは嬉しそうに駆け寄ってきた。

「あ、ああ。よかったと思うよ」

音楽や舞台になってトンと縁がない人生を歩んできた。そんな俺がこんな場で評論家気取りの言葉を吐ける訳もなく、不意に出た言葉はそんな小学生の読書感想文レベルの拙いワードだけだった。

「もつとこうなんかないんですか!?!」

ぷうと頬を膨らませながらこちらを見つめる相葉さん。かわいい。

「ほら、慶ちゃんもなんか言っただけで!」

「わ、私!?!」

先ほどまで熱い程の視線をステージに送っていた青木さんの姿はそこにはなく、今は相葉さんに揉みくちやにじゃれ付かれている年相応の女の子が一人。

「あ、相葉さん、青木さんが困ってるから……」

一応同じ大学の先輩としてなげなしの助け舟を出してやることにする。

「それは相沢さんがちゃんと私のステージの感想を言ってくれないから!」

矛先が青木さんからこちらに移る。ごめん青木さん。助け舟として出した船はどうやら泥船だったみたいだ。

「夕美、入っても大丈夫か?」

そんな時だった。ふと控室の外から男性の声がかかる。

「あ、プロデューサーさん！大丈夫ですよー」

「いやあ、悪いな。機材トラブルとかで急に事前に渡してた音源がダメになって……」

ガバリと大きくテントのビニールを押しつけて一人に男性が入ってくる。

「いやあ、本番前に声かけられなくて申し訳ない。いいステージだったぞ」

「ありがとうございます！それが聞いてくださいよ、実はトラブルと言えばこっちはハプニングが起きてこちらの相沢さんが本番前に……」

相葉さんが楽しそうにプロデューサーと呼ばれた男性の元に駆けていくところで男性はようやくテントの中に居る俺の存在に気づいた。

「ってあれ、なんかこの人見たことあるぞ。」

「ん、相沢さんってスタッフ居たっけか？……ってあれっ」

「あっ」

俺の姿を目にすると同時に一瞬驚くと、彼はその表情をすぐに満面の笑みに変えた。

「いやあーまた会えそうな気がするって言ったもののまさかこんなすぐに会えるとはなっ！」

「あーいや、これは何と言うか手違いみたいなもので……」

そこに居た彼は、先ほどまで同じベンチで言葉を交わしていた男性その人だった。

「……お知合いですか？」

俺たちの会話の内容が理解できないのか不思議そうな顔を浮かべている青木さんが俺と男性の顔を交互に見つめている。

「まあ、そんなところだ」

「一回しか会ったことありませんけどね」

「そんな寂しいこと言ってくれるなよ」

「俺がここに拉致られる前に一緒のベンチでちよつとだけ喋っただけですよ」

なかば強引に連れていかれた先ほどの出来事を思い出す俺。うん、やっぱりさっきのスタッフさんの力はおかしい。

「一緒のベンチ……ってそういうことかっ！ごめんなさい相沢さん！」

俺の言葉に反応したのは先ほどまでニコニコとこちらの顛末を見つめていた相葉さん。
ん。

「どういうこと？」

「いや、私スタッフさんにプロデューサーさんがどこかって聞かれたときに外のベンチに座ってるスーツの人って言っちゃったんです！」

……要するに、俺はこのプロデューサーさんと間違えられてここに連れてこられた訳ですか。

「なるほど……そんな偶然が」

いや、青木さんもそんなさりと納得しないで。

「なるほどなあーそんな偶然が。えっと、相沢君だっけ?」

そう言いながら男性は一枚の名刺をこちらへと差し出しながら近寄ってくる。名乗った覚えはないけれど……そうか、相葉さんが俺の名前を呼んでいたな。

「山上大悟。346プロダクションアイドル部門のプロデューサーだ」

「えっと、改めまして、相沢祐介、東央大学の3年です」

「それで相沢君、やりたいことは見つかりそうかい?」

この人はいきなり何を……ってさっきの話か。俺は先ほどのベンチでの会話を思い出しながら山上大悟と名乗った男性の質問への返答に躊躇していた。

「いえ……短時間じゃ見つかりそうにはないです」

俺の答えに彼は意外そうな表情を浮かべている。何か余計なことを言っただろうか。

「んー、これは案外理解されにくい物なんだけどね」

そう言いながら彼は控室の机から椅子を一つ引つ張り出すとそこへと腰を下ろした。こう見るとこの人足長いなあ。

「人が変わる瞬間っていうのは一瞬なんだよ。人がきつかけを手に入れるのに時間なんて必要ないってことさ」

「……何が言いたいんですか?」

俺は彼の言葉の真意を図りかねていた。俺はいつた今何を試されているんだろう。

「どうだい、相沢君。俺の元でアルバイトをしてみる気はないかい？」

次に直接的に俺に浴びせられた言葉は俺の予想の遥か斜め上の言葉だった。

「は、え？」

「俺は君にプロデューサーの才能があると思ってる」

「いや、急にそんなこと言われましても！」

そんなこと突然言われてもはい分かりましたと言える人生を送ってきた訳ではない。俺の次の言葉を山上さんはしっかりと待っていてくれる。俺はこの場で何と答えるのが正解なんだろうか。そんなぐるぐると渦巻く俺の頭の中を突き破る様に誰かの言葉が入り込んできた。

「相沢さん、断っちゃうんですか？」

声の主は相葉さんだった。不安そうな顔でこちらを見つめている。気づけばその隣の青木さんまで同じような表情でこちらを見ていた。

「えっと……」

「私嬉しかったです。相沢さんに声を掛けてもらって。大切なことを思い出せた気がします。ステージに立ってみようって、アイドルになろうって思ったきっかけ」

きっかけ……。相葉さんが思い出したそれが、俺にとつての今ってことなんだろう

か。

「私も相沢さんと一緒に、アイドルを応援してあげたいなって思っています。理由は上手く言えないですけど……」

拙いながらも青木さんもどうやら相葉さんを援護しているみたいだ。

三人に見つめられながらどうしようかと思巡る俺。そんな俺の気持ちを動かしたのは両手に感じた暖かな温もりだった。

「私たちと一緒に、彼女たちに魔法をかける魔法使いを目指しませんか？」

ぎゅつと握られた俺の手。そんな俺の手を握る柔らかな感触の持ち主は青木さんその人だった。よく見れば相葉さんも山上さんも彼女の行動に若干の驚きの表情を浮かべている。

至近距離で見つめる青木さんと目が合う。全く男というのは現金なもので可愛い女の子にこうもされると途端に己の迷いなんてものはどこかに吹き飛んでしまうものだ。

「……前向きに、健闘させていただきます」

吹き飛んでいく俺の迷いが遠くの方に見えるようだ。

「あ、それだったら私の名前は夕美でいいよ！それと慶ちゃん、いつまで手握ってるのさ」

「は、ええっ、あ、ごめんなさい!!」

こちらに花のような微笑みを飛ばしながら同僚をからかう相葉さん、もとい夕美ちゃん。やっぱり彼女には不安な顔よりも笑顔が似合う。かわいい。

「ほら、せつかくだから慶ちゃんも名前前で呼んでもらいなよ」

「いや、私はほら、いいよ……恥ずかしいし」

「相沢さん、慶ちゃんも名前でもいいですよね！」

美少女にそう言われて断れるほどの鋼のハートを持っている俺ではない。

「よろしくね、夕美ちゃん、慶ちゃん」

俺は二人の名前をあつさりとした下の名前と呼んでしまうのだった。

「け、慶ちゃん……」

青木さん、もとい慶ちゃんは部屋の隅ついで顔を真っ赤にしながら壁へとなにやら呟いている。

これはあれだ、カッコいい男や気になっている男に名前を呼ばれたからなんて勘違い野郎にはなりたくないから事前にそんなことはないと自分に言い聞かせておかないといけない奴だな。きつと姉妹ばかりの生活で男に慣れていないからに違いない。勘違いするなよ俺。うん、きつとそうだ。

「仲良くなったように何よりだ。ま、詳細はまた追って連絡するよ。相沢君は夜は暇してる。」

気づけば山上さんが机の上に何やら手帳を広げながらこちらへと尋ねてくる。

「えっと、講義が終わりましたら暇ですので、18時以降なら……」

「それならその時間にまた連絡するよ」

「はい」

こうして俺はとんだ偶然をきっかけに346プロダクションプロデューサー見習いとしての道を歩み始めることになるのだった。

初出勤とウサミン星人

「それじゃあこれが社員証ね。バイトって言うてるけど一応は契約社員って形で働いてもらうから。で、出勤したらまずは受付のこの機械でカードを通して。これで建物全体での出入りを管理してるから。その他にも従業員のタイムカードも一律でこの機械で管理してるから退社するときは必ず通すことを忘れないこと。お給料はきっちりこつちで管理してるから心配しないで。社内に居る時間と、俺についている時間はしっかり出るから。まあ、例外はあるかもしれないけれどその時はその都度対応するね。うちの事務員さんたちみんな優秀だから多少のイレギュラーはしっかり対応してくれるさ」

「は、はあ……」

「ま、分かんないことがあつたら何でも聞いてくれて構わないよ」

半ば成り行きで346プロでアルバイトをすることになって初めての出勤日を迎えた。服装が分からなかったため就活用のスーツを着込んできたら山上さんが苦笑いをしていたのを俺は忘れない。

そして今はこうして案内図がないと迷子になるレベルでデカイこの346プロダク

シヨンの建物の一階で俺は山上さんからの諸々の説明を受けているのだった。

「まあ、言っても俺の雑用みたいなもんだからあんまり気負わないでくれ」

そう言つて軽やかな笑顔を浮かべる山上さんのだが、さつきからこの場を行き交う様々な人物から声を掛けられている辺り社内ではかなり名の知れた人なのではないだろうか。

「それで、今日は何をすればいいんでしょうか……」

「そうだなあ……」

そう言つて考え込む山上さん。いや、何も考えてなかつたんかい。

「あら、おはようございます山上さん」

そんな時だった。喧騒の中でも透き通るような綺麗な声が山上さんの名前を呼んだ。

「お、楓ちゃん。おはよう。今日はレッスン？」

「いえ、今日はこの後は雑誌の撮影が有りました。時間までこちらのカフェでお茶でもと思つた次第です」

そこに居たのはまるで絵画の世界から飛び出してきたかのような美麗。大人の色香漂うその姿は、芸能ミーハーな俺でもご存じの今を時めく人気アイドル、高垣楓その人だった。

「うお、高垣楓だ」

「楓さん、な。相沢君」

「す、すいません。高垣さん」

予想だにしない人物の登場で思わず素が出てしまう俺。これは山上さんにしつかりと咎められてしまった。以後気をつけねば。

「それで山上さん、こちらの方は？」

彼女が言葉を発するたびに耳がマイナスイオンを浴びているかのような錯覚に陥る。これがトップアイドルの魔力かつ！

「彼は相沢君だよ。今日から俺のサポートとしていろいろやつてもらおう。ほら」

山上さんが喋り終わると同時に俺の背中に彼の手がポンと当たる。

「相沢祐介です。きよ、今日からこちらでお世話になります。よろしくお願いします！」
「恥ずかしい。こんな美人と話すのなんて人生でも片方の指でも足りるくらいしかないから思わずどもってしまいました。」

「高垣楓です。よろしくお願いますね」

お、おお……。よろしくされてしまった。

「まあ、楓ちゃんとは部署が違うしあんまり絡みはないかもしれないけれど俺の可愛い後輩だからよろしく頼むよ」

「はい、かしこまりました」

そしてかしくまられてしまった。それにしても山上さんとは部署が違うのかあ……。運がいいのか悪いのか。どちらかというと残念な気持ちの方が大きい。

「それでは私はこれで失礼いたしますね」

「ああ、撮影だったか。上手くいくことを願っているよ」

「当然、上手く行かせますよ。撮影だけにすカット行きますように。なんて」

「この人の親父ギャグ好きはテレビ用のキャラ付けじゃなく普段からなのか……。

「それでは」

「ああ」

「お、お疲れ様ですっ!」

過ぎ去っていく彼女に向けて俺は慌てて言葉をかけた。

「……相沢君、そんなだと今から疲れるぞ」

「と言いますと?」

高垣さんが去った後、未だに夢か現実か定かでない俺に山上さんが何かを察したかのような声を掛ける。

「確かに楓ちゃんは今346でもトップクラスの売れっ子アイドルだが、彼女ぐらいの美貌の持ち主はこの事務所には事欠かないからな。そんなでいちいちドギマギしてたら持たないぞ」

「うぐっ」

なるほど、確かに痛いところをつかれた。

「でも、日常生活であんな美人と面と向かって話すことなんてありませんでしたし……。そこは大目に見てもらえるとありがたいです」

「ま、俺も最初は似たようなもんだつたから気持ちには分からなくはないけれどね。追々慣れていってくれとしか言いようがないな」

残念ながらこの件についての先達から有力なアドバイスは聞けそうになさそうだ。

「それで……が会議室な。全部で20か所あるから会議室で何かある時は場所を間違わないように気を付けてくれ」

その後、俺は山上さんに建物内の主要な施設を案内してもらいつつ山上さんが普段働いているオフィスを目指すこととなった。

「20つて……そんなにあるんですか」

「まあな。で、……ここが俺の普段働いているオフィスだ」

気づけば歩いてきた建物内も上へ奥へと進んでおり、いつの間にか俺たちの目の前には何やら広々とした部屋に続く扉が現れている。

「やつと到着だ。……ここが346プロダクションアイドル部門第3営業課。第3とか、3課って言われたときは基本的に……このことを指すから気を付けてくれ。それじゃあ中

へどうぞ」

ガチャリ、とこ気味のいい音が響き扉が開くと共に俺の目の前にはよくある学校の教室二つ分をくつつけたぐらいのスペースの部屋が現れた。所狭しと並べられた机の数々と乱雑に本やファイルなどが立てられている大型の本棚、そして傍らにはソファーと机、正面にテレビという簡素な休憩スペースが作られている。ん、奥の方にあるのはあれは給湯室か？

「ようこそ。ここが今日からの君の職場だ。出勤したらまず特に指示がなければここに来てくれ」

「は、はあ……。それにしても何と言うか……」

「うん、君の言いたいことは非常にわかる」

そうなのだ、何と言うかこの部屋……全体的に雑然としている。いや、あの机の上に置かれたタレント名鑑のアンバランスさよ。あと、散らかってる書類そのままのはどうかと……。

「ということ君に最初にやってもらおう今日の仕事はこれだ」

「これってまさか……」

「ああ、この部屋を整理してもらおう」

「………さいですか」

改めて辺りを見回すが何と申うか、素人目に扱ってもいい物かどうかためらってしまふような書類も見受けられるのですが……。

「いやあ助かるよ。廊下やロビーなんかの共用スペースは清掃の業者さんが居るんだけどねえ。こういう重要書類があるような場所は業者さん入れてないのよ。だから非常に助かる」

「これ、一人でやれということですか？」

何度辺りを見回しても部屋の広さが小さくなるというサイキックな現象が起こる訳もなく、この先の出来事が容易に想像できて気が沈んで行きそうになる。

「あーそうだね。ファイルや本なんかは一応棚に何が仕舞ってあるかの付箋が貼られているからそれを基準に入れていってくるとありがたい。書類なんかは右上の日付基準で今日より一か月前のものはシュレッダーにかけてやって。それ以外で判断に困るものは……あ、そうだ。困ったら菜々ちゃんに聞いちゃって」

「な、ナナちゃん……?」

「菜々ちゃんー!」

山上さんが大声で名前を呼ぶと同時に先ほど目に付いた恐らく給湯室だろうスペースから何やら謎の二本の耳が飛び出してきた。

「うおっ、宇宙人!」

「はいはいー山上さんお呼びですかー菜々ですよー」

そして姿を現したのは頭に2本のウサミミを生やした謎のメイド服の美少女。

「何でしょう。山上さん」

「つと、その前に紹介しよう。こちら、今日からここで俺のサポートについてくれる大学生の相沢君。相沢君、こつちが菜々ちゃん。3課のヌシだから困ったことがあつたら何でも菜々ちゃんに聞いてちゃって」

「は、初めまして、相沢です」

「いや、ヌシって！んんつ、初めまして！ウサミン星からやってきたウサミミメイドのウサミンこと安部菜々です！」

「よ、よろしくお願いいたします……」

また随分濃いのが……。

「んもう、堅苦しいですよ。菜々の方が年下なんだからもつと砕けちゃってください」
ま、まじか……この人年下なのか？何やら得体のしれない母性を感じたからてつきり年上なのかと……。

「因みに菜々ちゃんは永遠の17歳だ」

「んもうっ！なんで余計なこと言うんですか山上さん」

……なるほど、そういうキャラだった訳ですかえ。

「それじゃあ俺は行くから」

そう言つて恐らく自分のデスクであろう机からいくつかの書類をカバンへと詰め込む山上さん。

「あれ、山上さんはどっか行くんですか？」

「ああ、相沢君には言つてなかつたか。ごめん、この後夕美のレッスンと撮影が入つてるんだ。その付き添いに行かなきゃいけないから」

「夕美ちゃんのですか？」

「ああ、夕美、屋外での撮影は初めてだろうから付き添つてあげなきゃかわいそうだろうな」

「じゃあ行つてくるな」

「はい、お気をつけて」

部屋を出ていく山上さんを見送るとその場に残されるのはしががない学生バイトと謎のウサミン星人。

「あ、あの……。俺、この部屋の掃除を任された訳なんですけど……」

とりあえずこの場を何とかしようとうサミン星人こと安部さんへと声を掛ける。うん、絶対にこの人年下じゃねえ。

「はい、相沢さんだけじゃ大変だろうからナナもお部屋の掃除手伝いますよ！そのうち

やろうと思っていたのでちようどよかったです！」

「それじゃあ捨てちゃいけない書類だけ教えてもらってもいいですか？」

「ナナで分かる範囲でよければ。分からないものは……山上さんのデスクに放り出しちゃいましょう！」

そう言つて悪戯っぽく笑う菜々さんの笑顔に思わずドギマギしてしまう俺。朝の高垣さんの件と言い役得なのか厄日なのか分かりにくい一日だ。

それにしても俺は一つだけどうしても安部さんに聞きたいことがあった。

「あの、安部さん……」

そう言つて机の上の書類を一枚一枚丁寧に確認している安部さんへと声を掛ける。

「菜々でいいですよ。みんなそう呼んでくれるので。それに、相沢さんにはこれからお世話になりますからね！」

「じゃ、じゃあ菜々さん」

「さん付けはやめてはくれないんですね……」

菜々さんは悟つたような視線を窓の外へと振っている。今まで似たようなことがたくさんあつたんだろうなあ……。

「俺も相沢君でも相沢でも好きなように呼んでください」

「じゃあ祐介君」

「えっ」

突然下の名前で呼ばれる俺。女性にそんな風に呼ばれる事って最近あったっけな……。止めよう、思い出して悲しくなる。

「祐介君がさん付けを止めないならナナもそう呼んじやいます」

年上に対して失礼を働くことは俺のプライドが許さないというか人としてどうかと思うのでその要望だけは受けられない。大人しくここは下の名前で呼ばれることにするでしょう。

「それで、なんか聞きたいことがあったんですけどよね、なんなんですか？」

そういえばさっきの下りのせいで忘れかけていた。

「えっと、菜々さんはその……346のアイドルなんですか？」

これだけ可愛いしキャラも濃いんだから今更な質問だっただろうか。

「あー」

俺の質問を聞いたナナさんは一瞬だけ視線をまたどこかへと飛ばしている。なんか不味いことでも聞いてちゃったか？

「バレちゃいました!? 何を隠そうこの私は歌って踊れる声優アイドル、ウサミン星から来たウサミン星人、ウサミンこと安部菜々なのです痛いっ!」

バシッとキメポーズを決めようとして右手を大きく机にぶつけるウサミン。

「こ、この部屋の狭さを忘れてました……。いててえ……」

「だ、大丈夫ですか？」

「こんなの慣れっこなので」

バラドルかなんかなんですかね。この前この事務所の輿水ちゃんがスカイダイビングしたのはテレビで見ただけ……。

「それよりも、時間もあれなので部屋の掃除続けちゃいますか！私が手をぶつけたのだから元はと言えばこの部屋が狭いのが悪いんです！」

「そ、そうですね」

その後俺は菜々さんと協力して一日中部屋の掃除に勤しむのだった。それよりも菜々さん仕事とか大丈夫なんだろうか……。

午前10時過ぎから始まった第3営業課の部屋の掃除は途中簡単なお昼休憩を挟んで結局夕方までかかった。

4時過ぎに戻ってきた山上さんの一言で今日はここまでということになり、今はこうして346プロ内の休憩スペースで缶ジュース片手に労働後の自分へのご褒美タイムを味わっているという訳だ。

「あ、相沢さん！」

そんな俺の元に声を掛けてきたのはTシャツ姿の黒髪美少女。

「あ、慶ちゃん。お疲れさま」

「け、慶ちゃん……」

彼女は青木慶ちゃん。この346でアイドルのトレーナー見習いとしてお姉さんの元で勉強をしているらしい。思えば彼女の一言があつたおかげで今俺はこうしてここに居るのかも知れない。

「レッスンは終わり？」

「はい！今日はニュージエネの3人と一緒だったんです」

ニュージエネレーション。ここ1年ぐらいで一気に知名度が上がった高校生ユニットだな。アイドルに詳しくない俺ですらテレビで何度も彼女たちのパフォーマンスを目にしている。

「すごいな。有名人と一緒にじゃん」

「何を今更なこと言ってるんですか」

「確かにそりゃそうか」

俺の発言に苦笑いを浮かべながらさりげなく隣に腰かけてくる彼女。レッスンは終わりのケアだろうか。仄かに香る制汗剤の匂いが何と言うか、心臓の鼓動を若干早めてく

るから俺の精神衛生上によろしくない。

「頑張ってるんだな」

「まあ、夢ですから」

こうして彼女と面と向かってしっかりと話すのは初めてだな。この前の夕美ちゃんの時はしっかりと言葉を交わすなんてなかったし。

「夢……かあ」

最近いろんところで聞くことが増えたし、それについて考える機会も増えた気がするなあ。

「おつ、こんなところに居たのか」

俺が彼女の言葉に想いを馳せようとしていたところにふと聞き慣れた声が聞こえてくる。

「あ、山上さんお疲れ様です！」

「お疲れ相沢君。つと、慶ちゃんも居たのね」

「あ、はい！お疲れ様です。姉にこの前の話をしたら後で言いたいことがあるって言ってましたけど……」

「げ、麗ちゃん？」

「はい、麗お姉ちゃんです」

「勘弁してくれ……」

おお……なんだかんだ俺の中で評価が高い山上さんの意外な弱点だ。覚えておこう。

「それで、山上さんはどうしてここに？」

「ああ、忘れるところだった。相沢君はもう夏休みだろ？」

「ええ、そうですけど……」

「私もそれ聞いた方が良いです？」

俺と山上さんのやり取りの横で何やら慶ちゃんが不安そうな表情を浮かべている。

「もちろん、慶ちゃんについては聖ちゃんに確認取ってるよ」

「うげ……。で私は何をすれば」

慶ちゃんの言葉に山上さんは満足そうに頷くと懐から2枚の紙を取り出した。

「よし、それじゃあ三日分の泊りの準備をして二人とも明日同じ時間に3課の部屋に集

合だ」

「は？」

俺と慶ちゃんの声が重なる。当然だ。事情が全く呑み込めない。

「熱海に行くぞ」

「ええっ!？」

こうして俺と慶ちゃんの波乱の熱海編が始まるのだった……。いや、本当にどうい

波打ち際の灰被姫

空に燦燦と輝く太陽、目の前に広がる青空よりも澄んだ海、そしてその色をより鮮明に魅せる真っ白いキャンパスのような砂浜。

最初こそ興奮したその光景も既に6時間以上視界に収めていればもう煩わしく思えばかりだ。

全身を襲う疲労感が、両手にズシリと重くのしかかるクーラーボックスのせいなのか、既に飽きかけているこの景色のせいなのか分からないままにただ心を無に近い状態にしながら一人歩みを進めていた。

「さすがに……しんどいぞこれ」

身に着けているTシャツも既に俺の全身から噴き出た汗を目いっぱい吸い込んでおり肌に張り付いてうっとおしいうえにここに着いた当初よりかなり重く感じられる。

俺は今、スタッフと演者用に用意されているドリンクが目いっぱい詰められたクーラーボックスを運びながらこの熱海の砂浜を一人で歩いていく。

今日俺がここに居る理由、それは346プロダクションアイドルの水着撮影の雑用と

して仕事をするためだ。

雑用だとは事前に聞いていたけれど流石にここまでき使われるとは……。とは言うものの役得なところも多分にあつたのでそれは言うまい。

「お、遅いぞ相沢君」

「流石にこの量を一人なんで遅いのは勘弁してくださいよ……」

目的地のテントへと足を踏み入れた直後、俺の元に声を掛けてきたのはバイト先である346プロダクションでの俺の上司である山上プロデューサーだ。

「仕事なんだから頑張ってくれー」

「と言いましても俺ただのバイトなんですから……」

急に前日に熱海に行くぞなんて言われて来てみれば炎天下の中荷物運びやテント設営。流石に文句の一つぐらい言っても良いんじゃないだろうか。

「時給は他よりもいいはずだぞ？」

その言葉に俺の脳裏にいくつも浮かんでいた悪態の言葉がすつとまるで火照った体に制汗シートを当てられた時のように引っ込んでいった。

確かに……事前に知らされていた通りであればこのバイト、実はかなり時給が良い。1時間働くだけでその辺のコンビニとかだとその倍を働かなければいけないほどの給料が貰える。それに関しては全くもって不平不満の一つもない。

「そ、それを言われるとそうなんですけど……」

全くもって偶然降ってきたこの仕事、その点に関してはかなり手放すのが惜しい。それに……。

「あれ、相沢さん！お疲れ様です」

「あ、ああ……。夕美ちゃんもお疲れ。撮影はもう終わり？」

「はい、私はもう今日はここまでです！」

水色をベースに彼女のイメーajでもある花柄をふんだんにあしらった水着、そしてそこから見える健康的な素肌。新進気鋭の新人アイドル相葉夕美の水着姿をこうして生で拝めるといふとんでもないおまけ付きでもある。

「見すぎです。相沢さん」

そこに現れたのは既に何回か目になっているプロダクションのTシャツに身を包んだ黒髪の少女。

「け、慶ちゃんもお疲れ。そ、それよりも見すぎってどういうことだよ。そそそ、そんなことないぞ!!?」

「誤魔化すならもつと上手く誤魔化しましょうよ……」

慶ちゃんは346プロダクションの専属トレーナー見習い。今回の撮影にはトレーナーの勉強の為に参加している。まあ、本当のところは山上さんが予算をケチったせい

でどうにも人手が足りないということまで白羽の矢が立つたらしい。

「山上さん、文香ちゃんと加奈ちゃんの着替え終わりました」

「ありがとな、今回スタイリストさん一人しか手配できなかったからさ」

「これくらいであれば……」

今回の撮影には他にも数人のアイドルが参加しており、我が営業3課からは夕美ちゃん、鷺沢文香さん、そして今井加奈ちゃんの3人が参加している。

ちなみに夕美ちゃん以外の二人とは朝の時点でちよつとだけ言葉を交わしてはいるもののそれ以上でも以下でもない何とも言えない関係だ。今後親しくなる機会は来るのだろうか。

「相沢君、アイドルの水着姿を生で拝んでおいて感想の一言もないのか？」

「い、いや……それは……」

こういう時素直に直接本人に感想を言うのはその、セクハラには当たらないのだろうか。いや、むしろ見られる仕事なのだから褒める方が当然なのだろうか……。

「むむむ……」

「何がむむむなんですか。私も相沢さんに褒められたいなあ〜」

そう言いながらこちらへと顔を寄せてくる夕美ちゃん。その体勢、その……胸元が強調されて俺の精神衛生に大変よろしくないんですね。

「あ、相沢君！ここに居たんですね。ちよつと手伝つて欲しいことがあつて……」

そんな時に現れたのは今回の仕事に帯同している菜々さん。こちらは夕美ちゃんとは違つて動きやすそうなTシャツにホットパンツ、その上に半袖のパーカーを一枚だけ羽織つている格好だ。

「どうしました菜々さん？」

これは菜々さんナイスタイミング。この機に乗じてなんとか夕美ちゃんからの熱い視線を回避したいところだ。

「実は楓ちゃんの撮影で人手が足りなくて……。白いパネル持つて立つててくれるだけでいいので手伝つてもらえないでしょうか？」

「つてことらしいです、山上さん。行つてきますね！」

俺は夕美ちゃんとの一部始終を何やらニヤニヤしながら見つめていた山上さんの方へと視線を動かす。

「そりやしようがないな。相沢君行つておいで。菜々ちゃん、他は大丈夫？」

「はい、今のところはそれぐらいですかね……」

ということとで俺はこの場を抜け出す口実をしつかりと手に入れた訳だ。……女の子一人に掛ける言葉も見つからないとは、全くもつて自分でも情けない限りである。

「もう、根性無しなんだから……。あの時はかつこよかつたのになー」

「夕美ちゃん、それぐらいにしとこ。相沢さんも忙しいんだから……。まあ、一言ぐらいはあつても良かったと思うけどね……」

そんな夕美ちゃんと慶ちゃんの会話が聞こえないふりをしながら俺は菜々さんの後に続いてテントを後にした。

「んー、もうちよい視線左に向けてみようか」

「こんな感じですか？」

「そうそう。それでちよつと遠くに視線飛ばして、イメージとしては遠くに居る大切な人を想う……って感じかな？」

「んーこんな感じですか？」

「あーいいよ！それで何枚か撮らせて」

暫くしたのち、菜々さんに連れられて向かった先で俺は60センチほどの正方形の白いパネルを抱えていた。そんな俺の目の前では今、高垣さんが撮影を行っている。

白いワンピースに麦わら帽子、そこから伸びる蠱惑的な白い手足は、海から差し込む夕日に照らされて上手く言葉にできない魅力を醸し出している。

「すげえ……」

思わず感嘆の声が漏れる。昼前の水着姿も確かに素敵だったけど、それを超えるこの暴力的

な程に絵になる力。

俺は改めてトップアイドルというものの片鱗に触れたような気になる。もちろん彼女の魅力はこれだけではないのだろうが、今日の前の光景だけでも彼女がトップアイドルたる所以がひしひしと伝わってくるのだ。

「うん、それじゃあ後は水着と夕日で何枚か撮って今日はここまでにしようか」

そう言いながら今回の撮影に帯同しているカメラマンの吉田さんは何やら傍らのカバンから「ごそごそ」と道具を取り出し出している。

「でさ、聞いてよ楓ちゃん。この前教えたお店あつたでしょ、あそこが今期間限定の烏賊の料理やっててさあ……」

「烏賊ですかあ！またお酒に合いそうな……」

どうも吉田さん、高垣さんとは既知の仲らしくこうして撮影の合間に雑談を交わす様も今日一日を通して見慣れた光景になっていた。

先ほど目の当たりにした彼女の姿も、そんなトップアイドル高垣楓を身近に知る彼女からこそ引き出せるものなのかもしれない。

「あ、バイト君もありがとね。今日は撮影スタッフが少なくて困ってたんだよ」

「あーいえ、こんなことでよければ何でも声かけてください！」

「はいよー。それでこの前六本木のさあ……」

俺も既に何回もこうして声を掛けてもらっている。残念ながら名前は覚えてもらっていないようだ。が業界で生きていくにはこういうつながりも大切なかもしれない。

「あーそだ、菜々ちゃんもこの後せっかくだから撮っていく?」

「うえ!」

さつきまで高垣さんと談笑していた吉田さんが急に撮影で使った小道具を片づけていた菜々さんへと声を掛けた。

「な、菜々ですか!」

そういえば菜々さんの撮影は今日はないのだろうか。彼女自身も昨日事務所ですぐにアイドルだつてことを口にしていたし撮影があつてもおかしくはないと思うけど、今日は俺と一緒に裏方の作業をすればっかりだつたな。

「な、菜々はその……。あ、そういえば山上さんに頼まれてたことがあつたんですー! あ、吉田さん、撮影は事務所を通してお願いしますね!それでは失礼しますー!」

……話題の逸らし方が露骨にも程がある。一体何があつたのか俺にはわからないけど何かがあつたんだらうっていうのがバレバレだ。なんでそんなに寂しそうな表情を浮かべるんだ。菜々さんにそんな顔は似合わないのに。

吉田さんも苦笑いを浮かべながら機材の片づけに戻っているし。彼は菜々さんの表情の意味を知っているんだらうか。

「相沢君なら何とかできますかね？」

「うわ、びっくりした！」

気づけば高垣さんの顔が隣にあつて思わず飛び退いてしまう。

「あら、驚かせてしまいました？」

「と、突然だったもので……」

そんなに綺麗な顔が突然隣にあつたらそりや驚きますって……。

「というか名前、憶えてくれていたんですね」

まさかトップアイドルに名前を呼ばれることが人生であろうとは……。これは孫の代まで自慢できる案件ですよ。

「私、お仕事で一緒になった人の名前は忘れないようにしているんです。名前だけにえっと……ネーム……違いますね、なめえ……ダメですね」

「無理にダジャレを言おうとしなくてもいいですよ」

こんな時にまでキャラを突き通そうとするスタイルは正直見習いたいとは思いますがどね。

「それで、何とかっていうのは……？」

高垣さんの発言で気になったのはそこだ。俺なら何とかできる……？

「ん〜」

そういつて高垣さんは自分の顎に人差し指を当てながら何やら思案の表情を浮かべる。いちいち仕草が可愛いなこの人。

「私の口からはなんとも。という感じでしょうか」

要するに本人の口から聞いてくれ、つてことですね……何やら厄介ごとの香りがプンです。分かります。

「俺なんかには何か出来ることがあるでしょうか？」

正直俺に菜々さんの抱えているものが解決できるとは到底思えない。人の悩みを読み取ってそれを解決に導くなんて、それこそ……。

「超能力者じゃないんですから……」

「超能力者ですか」

「ええ、ましてや俺と菜々さんはあつて2日目ですよ。おいそれと悩みを話してくれるとは……」

「そうですねえ……それでも」

衣装の麦わら帽子からなびく髪を掻き分けながら高垣さんは波打ち際へと足を向ける。

「魔法使いなら、何とか出来るかもしれませんね」

そう言つて笑う高垣さんは、今日どんなレンズの向こうの姿よりも俺には輝いて見え

た。その笑顔に込められた意味を、俺はまだ知らない。

「相沢さんも酷いとは思いませんか!?!」

そう言いながら慶ちゃん俺の奢りのコーヒー牛乳を勢いよく自分の喉に流し込んだ。

「そりゃ確かに私はまだまだですけど、何がお前はまだトレーナーを名乗るには程遠いだな、ですか! 私だって未熟ながら勉強だつてたくさんしてるんです! 聞いてますか相沢さん!」

「聞いている聞いている」

「それ聞いてない人の台詞です!」

現在時刻は午後8時。二泊三日の熱海撮影の初日を終えた俺は今回の拠点となる宿で夕涼みがてらの散歩へと出ていた。

そしてそこに偶然居合わせた慶ちゃんに捕まって今に至ると言う訳だ。かれこれ30分近く姉への不満を口にしてる慶ちゃんだが。4姉妹の末っ子ということもあっていろいろ思うところがあるのだろうか。俺はまだ慶ちゃんのお姉さんには会ったことがないが話を聞く限りかなりストイックな人たちみたいだ。

「……素面だよね？」

「未成年ですよ！飲んでません！そんな相沢さんはこんなところに居ていいんですか？」

「いやあ……」

思い返すのは先ほどの惨状。夕食は宿の宴会場を貸し切って行われたのだがやたらとお酒に強い高垣さんと吉田さんに絡まれて身の危険を感じた俺は逃げるようにその場を後にしてきたのだった。

明日も撮影あるのに大丈夫なのだろうか。

「あー、あれはご愁傷さまでしたとしか。大丈夫ですか？」

「菜々さんが逃がしてくれたからね……」

俺の危機を感じてか途中から菜々さんが二人の相手をしてくれていた。というか菜々さん自分で自称17歳を名乗っておきながらあの場でバカバカと差し出されるアルコール類を流し込んでいったのはキヤラ的に大丈夫なのか。

「そういえば……」

そんな菜々さんの姿が脳裏に浮かび、俺はふと昼間の出来事が蘇る。あの時の彼女の表情が、今日一日ずっと心のどこかに引っかかり続けている。

もしかしたら慶ちゃんなら事情を知っているのかもしれない。

かといって本人のいないところで聞いてもいいものか……安易に首を突っ込むのは逆に失礼なのではないだろうか。

そんな逡巡する俺の心を動かしたのは、あるフレーズだった。

『魔法使い』

高垣さんが言っていたけど最近どこかでこの言葉を聞いたような気が……。

「どうかしましたか……?」

……あ、思い出した。いるじゃないか、目の前に。その言葉を口にした人間が。俺にきっかけをくれたセリフ。その言葉を口にした彼女ならば、俺のこの心のもやもやを何とかしてくれるかもしれない。

「なあ、慶ちゃん。一つ、聞きたいことがあるんだけど」

「えっと、なんででしょう」

魔法使い。果たして俺がそれになれるかどうかは答えは闇の中だ。だが増田が口にしていた。なるようになる。行きたい方向へと向かい続ける限り。

だから今は、行きたい方向へとただ向かうことにしよう。

「菜々さんに、何があつたのか教えて欲しい」

なるようになったその先で、俺は菜々さんにあんな表情をしていて欲しくはないから。

暗雲照らす太陽の君は

346プロ熱海撮影遠征も二日目を迎え、本日も俺こと相沢裕介はテント設営に荷物運び、そしてプロデューサーである山上さんのサポートにと朝っぱらから走り回っているのであった。

昨日の慶ちゃんとの話の後、俺は改めて何か菜々さんのためにできることはないかと考えた。が、正直彼女自身に起きたことを知らないことには対処のしようがない。

今日ではできるだけ事情を知っていそうな人に声をかけて情報を集めるしかないだろう。

高垣さんのサポートに付いている菜々さん自身が教えてくれるのなら一番いいんだろうけど昨日のあのリアクションを思い返す限りそうそういい思い出ではなさそうだな。「んじや相沢君、次はあつちで撮影を行いたいから先に砂浜のゴミとか拾つといてくれない?」

そんな俺の思考は突如かけられた山上さんの言葉で打ち切りを余儀なくされた。

「次の指示ですか?」

「こそ。あの辺のアンクル欲しいから頼むよ」

山上さんが指をさした方へと目を向けるとそちらには木やら空き缶やらの漂着物が砂浜へと打ち上げられている様が目に入る。

「わかりました。どれぐらいの範囲とかってありますかね？」

「んーとりあえず目につくものみんなかな」

なんとアバウトな。山上さんの方へと向けていた視線を改めてそちらへと戻す。海岸に打ち上げられている漂着物はパツと見一人の手では持て余すほどの量であり、到底、次の撮影という山上さんの要望には応えられそうにない。

「かなりの量ありますけど……」

「……俺が悪かった。撮影順ずらすから30分で頼む」

そこはトッププロデューサー。素早く吉田さんの方へと視線を移すと何やら目配せでやり取りを行っている。

それでも貰えた時間は30分。かなり厳しい時間を指定されたものだが、それでも俺は到底無理ですなんて言葉は言えず……。

「……行ってきます」

「ゴミ拾い作戦、よろしく頼むよ」

そんなこんなで俺は言われるがままに先ほど指定された場所へと足を向けるのだつた。

「それにしても……なかなかの量だな」

俺は足元に転がっている流木を一つ拾い上げると波打ち際とは別の方へと放り投げる。そこそこの量だが決して終わらないことはないだろう。

俺の作戦はまず一か所に漂流物を集める。そして次にそれをゴミ袋へと回収する。兵はシンプルを貴ぶ。わかりやすくいいじゃないか。そういう方向性で俺はこの一見無謀な突発的海岸清掃作戦を遂行することになるのだった。

「これは……缶だからあつちか」

カラン、と俺が放り投げたゴミ溜りの方から気味のいい音が響く。海岸清掃を開始してから15分が経とうとしている。俺が既に拾い集めたゴミはかなりの量になっており、先ほどのような音が聞こえてきた方向にも既に20以上の空き缶の山が出来上がっていた。

「つと、そろそろゴミを回収しはじめた方がいいな……」

俺が集まったゴミ山を目の前に作戦を次の段階へと移行しようと意気込んだその時だった。

「相沢隊長、作戦は順調ですか？」

「あ、け、慶ちゃん？」

「は、はい」

名前を呼ばれ振り返ったそこには、大きなビニール袋を複数握りしめた慶ちゃんが立っていた。

「どうしたの、顔赤いけど。暑い？」

「え、あ、はい！そんなんですっ！今日も暑いですねえ！」

右手で自分の顔をパタパタと仰ぎながら逆の手のビニール袋を俺の方へと差し出してきた。

「どしたの？」

「どしたのじゃないですよ。山上さんにこっちで相沢さんがゴミ拾ってるから手伝ってやれって言われたので手伝いに来たんですよ」

「あ、ああそういうこと！」

そういうえば慶ちゃんはさつきまで鷺沢さんと今井ちゃんのサポートに入ってたんだっけ。ほら、男の俺だと女の子の着替えの手伝いとかはできないでしょ？残念ながらそういうことだ。

「それに山上さんから手ぶらで行ったって聞いたので」

俺が慶ちゃんから受け取ったビニール袋を広げるとそこにはでかかどこの辺の自治体の名前とセットで燃えるゴミ、燃えないゴミ、缶の文字がそれぞれ入っている。

「ほら、集めたゴミ入れる袋無いと不便じゃないですか？」

「……完全に失念してた」

「意外と抜けてるんですね、相沢さん」

そういつて小さく笑う慶ちゃんは太陽に照らされて普段以上の魅力を魅せる。決して夏の浜辺に二人つきりというシチュエーションに揺さぶられたとかそういう訳じゃない。……つて誰に言い訳をしてるんだか。

「何難しい顔しているんですか？」

「……いや、何でもない。手伝いに来てくれて助かった」

「はい！さっそく集めちゃいましょう！」

それにしても慶ちゃんが来てくれて助かった。単純に人数が倍になったおかげか今まで少しずつしか進行していなかったゴミ拾いは格段に手際が良くなったように感じるからな。

それに、こうしてもう一つの懸念事項の話もようやく出来そうだ。

「菜々さんの話、誰かに聞けたかい？」

「そのことなんですけど……」

結局昨日の夜、菜々さんについて何らかの情報を得たい俺は昼間に感じたことを慶ちゃんへと話していた。

菜々さんが何やら事情を抱えていること、そしてできればそれを解決してやりたいこ

と。俺が思ったことを素直に彼女には口にしたのであった。

「昨日も言ったと思うんですけど……」

そんな俺の言葉に、彼女は昨日と同じ答えを突き返してくるのだった。

「相沢さんの気持ちとはともあれ、事情を知らない私たちなんかむやみやたらに首を突っ込むのはやめた方がいいんじゃないかと……」

そう言つて慶ちゃんも視線を下に落とす。確かに彼女の言っていることはごもつともだ。素人の俺、そして慶ちゃんも俺より346で働いている歴は長いとはいえお世辞にもルーキーの枠を脱することはできていない。そんな二人が関わる事で余計に事態がややこしくなることぐらいい懸念できる。

「菜々さんは私たちみたいなお子でもじゃないんです。アイドル歴だったら346のどのアイドルたちよりも長いんです。そんな彼女が抱えているものは多分私たちの手ではうにかけるものなんかじゃないんですよ……」

沈黙が二人の間に流れる。照りつける太陽の熱さとは裏腹にその場の空気は日雇いで冷凍庫のバイトに行った時ぐらいい冷たく感じる。

「なんだ二人して。もうちょっとじゃないか頑張ってくれ」

そんな二人の間に流れる空気を溶かすようにその場に現れたのは山上さんだった。

「あ、もう30分経っちゃってます!？」

「まあ、ぼちぼち30分だな」

「す、すいません!」

「ごめんなさい、私が手伝いに入ったのに」

現状を思い出した俺と慶ちゃん慌てて目の前のゴミを袋に詰める作業へと戻る。

「まあ、30分なんて適当に行ってみただけだから気にするな。菜々ちゃんのおかげで文香と加奈の撮影がスムーズにいったもんだから割とスケジュール的には余裕があるんだよ」

「そ、それならよかった」

俺は焦る心を一旦落ち着けるとふっと一息息をついた。俺のせいでみんなに迷惑かけるなんてごめんだからな。

「それにしても二人でなんか気まずい感じだったけどなんかあった?もしかして痴情のもつれか?出会ってそうそう経ってないってのに相沢君も手が早いな」

「ち、違いますよ!」

突然何を言い出すんだこの人は。俺みたいなのが大学内でも隠れファンが多いこと
で有名(軽音部:高崎談)の慶ちゃんなんかと……。

そう思いつつちらと隣の慶ちゃんに視線を移すとそちらの方は黙ってうつむいている。さすがに俺なんかとそんな関係だと思われるのは嫌だったんだろうか。照れ隠し

だったりすると嬉しかったりするんだけど、現実はどう甘くないんだろうなあ。

「まあまあ冗談だ。で、作業は終わりそうかい？」

気づけばコツコツと手を動かしていたおかげか積み上げられていたゴミ山はすつかり姿を消し、その横にはパンパンに膨れ上がったビニール袋が数袋転がっているのみになっていた。

「はい、なんとか」

「流石だね。頼んだ甲斐があつたつてもんだ」

「あはは……30分には間に合いませんでしたけどね」

「それは減点だな」

「うげ、まじですか……」

「つてことで罰としてこのビニール、うちのワゴンに積んどいて。宿まで持って帰るか
ら」

「かしこまりました」

俺は指示通りにビニール袋を掴むとそそくさと346プロが機材搬入のために今回使用しているワンボックスカーへと向かうことにした。

まあ、拾ったゴミを捨てるところまでが元々の俺の仕事だったのでだろうから山上さん的には罰なんて最初からなかったんだろうなあ。

「あ、相沢さん！」

車へとゴミを積み込んだ帰り道、俺は撮影待機のために控えていた夕美ちゃんに声をかけられた。

「あれ、テントの中で休んでるんじゃないの？」

本日の夕美ちゃんは私服姿での撮影となるため残念ながら今日は昨日みたく水着姿ではない。それでもなお、淡いオレンジ色のTシャツとジーンズ生地ホットパンツから伸びる手足が健康的な色気をふんだんにまき散らしており俺の心が緊急で対ショック体勢を取るレベルに彼女は魅力的だ。

「今楓さんが撮影してるんですー！それで、加奈ちゃんと一緒に勉強のために見に行こうって」

「なるほど、それで今井ちゃんは？」

「今井ちゃんって……昨日もそう呼んでるの聞いてましたけど他人行儀すぎませんか？」

ジト目でこちらを見つめる夕美ちゃん。変な性癖が目覚めそうなのでできればよんでいたきたい。

「い、いやだつて驚沢さんも今井ちゃんも昨日が初対面だぞ!?!そんな女の子相手に名前前で呼べる程俺の男子力は高くないんだよ」

「なんですか男子力って……」

「ほ、ほら、女子力に対抗して……」

「まあ、男子力の件は置いておくとして文香ちゃんは私と同年ですよ」

「……えっ」

「えつてなんですか失礼な！」

……やけに大人びて見えたから同い年ぐらいかと。それぐらいの年齢になるとちゃんづけもねえ。

「そ、それよりも撮影はいいのか？今日は高垣さんのスケジュールそんなに時間なかったから早くいかないと終わっちゃうかもだぞ」

「誤魔化し方が下手ですけど今は許してあげます」

「それはよかったというかなんというか……」

それにしても、ここ二日定期的に夕美ちゃんの顔を見ていたけれど、いつみても本当に楽しそうだなあ。……俺をからかう時以外は。

「なあ夕美ちゃん」

「どうしたんです？」

どこまでも吸い付きそうな彼女の視線と思わず目が合った。彼女の笑顔を見ていると、やっぱり俺はなるようになってほしいと思ってしまう。

「アイドル……楽しい？」

「もちろんっー！」

その笑顔は頭の上で輝く太陽のように眩しくて、そして、太陽には決してできない俺の心を温めてくれる。

その笑顔を見るたびに、俺はこれから彼女が舞台上で咲いた瞬間をずっと思い出すのだろう。あの輝きが、あのキラキラがアイドルなんだと。

「じゃあアイドルとしてどんどん頑張っていかなきゃな！」

「そうですね！だから、見ててくださいいね！私の、アイドルとして成長していく姿」

「……ああ、もちろん」

俺には夢がない。だけど、誰かの夢を支えることが出来るのであれば、それはきつと俺の夢なんだろう。

だから、俺は自分のためにこの道を歩いていく。誰かのためだけなんじゃなくて、誰かと、そして自分のために。

2日目の夜、昨日慶ちゃんと言葉を交わしたその場所で、俺はとある人物と会っていた。俺が進んでいくためにどうしても足りない、そのピースを持っているだろう人物に。

「教えていただけませんか。菜々さんに何があったのか」

「……ふう」

その人物は俺の問いかけに一つ大きくため息をつくとき雲が薄く覆っている空を見上げた。星は、隠れて見えそうにない。

「覚悟はあるかい？」

「……ええ、決めたとつもりです」

「そうか」

「はい、だから教えていただけませんか。山上さんなら知っているでしょう？」

どこから取り出したのか山上さんは煙草を一つ加えるとその先端に慣れた手つきで火を灯した。

「今から独り言を言う。ただし時間はこいつが消えるまで」

山上さんは先端が先ほどより短くなった煙草を指さしながらこちらに視線を送った。

「俺は何も尋ねてません」

「よろしい。それじゃあ何があったのか話そうか、菜々ちゃん、そのプロデューサー」

誰かのための何か

あるところに一人のアイドルを夢見る少女が居た。小さいころからテレビで憧れたその存在に近づくために、高校を出てすぐに都内のあるライブハウスに頭を下げて短い出番を得たそうだ。

右も左も分からない世界。そして地下アイドルと言えば左右どころか明日の居場所さえ分からないほどの不安定な世界だ。安定した収入など得られるわけもなく、アイドル活動の傍ら都内のあるメイド喫茶で身を粉にしながら働いていたらしい。

憧れた世界は自分の理想の世界とは全く違い、だがそれでも暗く澱んだその場所ですれでも必死に足掻き続けていたそうだ。

そんな彼女に転機が訪れたのは5年前のこと。その日も場末の小さなステージでなじみのファンとステージ後の交流会をしていたらしい。そんな時に現れたのが顔だった。

俺はそのステージを見たことはないが、それでもあいつにとっては心を動かされる何かを感じたんだろう。一人の駆け出しプロデューサーが彼女の元に現れた。ステージが終わった後、考える間もなくあの時は足が動いたんです。そうあいつは口にしていた

なあ。

急に手を掴んだものだから彼女はずいぶん驚いたらしい。そんな彼女を尻目にあいつはある言葉を口にしたそうさ。

「一緒に一番を目指そう」

その言葉と共に伸ばされた手。それが少女のシンデレラストーリーの始まりになる、はずだった。

順風満帆とまでは言わないでも、彼の手に惹かれるように歩き出したトップアイドルへの道は彼女にとっては今までいた地下の世界の何倍も眩しい景色だったはずだ。時に全力で、時に立ち止まりながら、彼女は彼と共にアイドルの道を歩き続けた。

そんな彼女に運命は非情ともいえる壁を叩きつけた。事務所の方針変更で彼女の活動方針の変更を余儀なくされたんだ。

そのせいで彼女の今まで積み上げてきたキャリアは揺らぎ、彼女の根幹ともいえるそのスタイルでは所属事務所でのアイドル活動の継続すら困難になっていった。

そんな時だ、あいつが姿を消したのは。

彼女の手を取って光当たる舞台へと引き上げた張本人。当時自分にできる全てをつぎ込んで彼女の居場所を守ろうとしていた。

そんなあいつが唐突に会社から、そして彼女の前から姿を消した。

それからだな。社の方針は別のプロデューサーの手によって何とか元には戻ったものの、彼女はそれ以来ステージに立つことは無くなった。もう2年近くなるうとしている。

彼女は今もその約束に囚われ続けているんだと思う。「一緒に」というその言葉に。あいつのいなくなったシンデレラロードという道の途中で、彼女は今も一人で佇んでいるんだ。

時折隣から漂っていた煙草の匂いが途切れる。

見れば山上さんは小さくなった吸殻を押し込むように携帯灰皿へとねじ込んでいた。「……独り言はそれで終わりだ」

俺は何も言えずにそんな山上さんの仕草をただただ眺めるだけだった。

「さて、話したいことは話した。明日はもう事務所に戻るだけだから相沢君も早く寝ることだな」

「……今の話は、慶ちゃんは……？」

「まあ、知らないだろうね。慶ちゃんがこの事務所で働きだす頃にはもう彼女はステージには立っていないかったからな」

それだけ言い残すと山上さんは宿の自分の部屋に続く道の方へと歩いて行ってしまった。

聞きたいことは沢山あつたはずなのに、どうしても俺は去りゆく背中を追いかける力が湧かなかつた。

山上さんが話を始める前に口にした“覚悟はあるかい？”という台詞。その覚悟の重さというものを軽く見ていたことを痛い程に感じさせられていたからだ。

まだ短い付き合いだけれど、それでも菜々さんは俺に沢山笑いかけてくれていた。その笑顔に元気を貰って仕事に打ち込めたことだってある。その笑顔の裏にはこんなにもやるせない想いを抱えていたことを思うと言葉にならない感情がいくつも渦巻いていく。

「そんな……。そんなことをどうやって解決するってんだよ」

人は誰かの代わりににはなれない。菜々さんのそこには、今はただ一人分の居場所がある。もぼっかりと空いているんだらう。

その場所こそが、彼女がアイドルである原動力だったんだと言っても過言ではないくらいに大きな穴になっている。

そんな彼女の心を救ってあげられる方法が果たして存在するのだろうか。

彼女の心の穴を埋めるような、何かがある……。

「なんか、やるせないですね。やっぱりっていう諦めの気持ちと、何もできない自分が悔しいっていう気持ちがある渦巻いています」

「……俺も似たような気持ちだよ」

東京へと戻った日の午後、俺と慶ちゃんとは346プロ内のある休憩スペースで顔を合わせていた。

「話したいことがある」という短い内容の連絡を入れるとすぐに彼女の方から時間と場所の指定が寄こされ、こうして足を運んだという訳だ。

「でも、簡単に諦めていい問題だとは俺は思わないんだ。菜々さんの元プロデューサーがどんな人で、何を思って姿を消したのかは分からないけれど、それは菜々さんを放っておく理由にはならない。俺達にも何か出来るはずなんだと思う」

山上さんから話を聞いた夜、俺はほとんど寝れない夜を過ごしていた。蒸し暑かったり、波の音が騒がしかった訳では決してない。昨日の話を聞いて以降、俺はずっとそのことについて考え続けていたからだ。

まあ、結局解決策は何も浮かばないままだった。

「どうして……」

ふと隣の慶ちゃんが言葉を漏らした。

「ん、どうかした……？」

「どうしてっ……」

その言葉はどこか震えているように感じた。強く握りしめた拳の上、小さな雫が落ちていくのが目に入る。

呻くように、噛みしめるように、彼女はその言葉の続きを口にする。

「どうしてそこまで、相沢さんは彼女の力になりたいと思えるんですか……？」

彼女が今、どんな想いをその胸に秘めているのかまでは分からない。けれど今、その目から彼女がありつただけの思いの欠片を零しているのだけは確かに見えた。

その思いに恥じないように、俺も俺なりの言葉を口にしようとしたその時だった。

「どこのどいつだあ私の可愛い妹を泣かせているのは」

俺たちが座っているソファの真横、気づけばそこには一人の女性が立っていた。引き締まった健康的な体、綺麗な黒髪を後ろで束ねているのが印象的な綺麗な女性だった。

一步引いた印象を受ける慶ちゃんとは違い、明るく快活そうな印象を受ける女性だったがどことなく慶ちゃんに似た雰囲気も感じる。というか……。

「れ、麗お姉ちゃん!？」

隣の慶ちゃんが驚きの声を上げる。麗お姉ちゃんって……やつぱりそうでしたか。

「ん？君は……」

ふと、そんな彼女がこちらに視線を向けた。流石慶ちゃんのお姉さん。何と云うか、ただただ美人だ。

「ああ君が山上君が口にしていた相沢君か」

「あ、ええつと、初めまして相沢祐介です」

「慶の姉の青木麗だ。この事務所の専属トレーナー主任を務めている」

「よろしく願います。それでえつと、山上さんが俺の話を……？」

あの人、俺のこといろんな人に言っていたりするのか？

「ああ、話は聞いているぞ。何でも生きのいい手足が手に入ったとか」

「生きのいい手足って……」

なんて言いようだよ……。いやまあ、熱海での俺の働きを考えると全くもってその通りなので何も言えないんですけどね。

「で、こんなところでうちの妹泣かせてどうしたんだ。痴話喧嘩か!」

「どうして山上さんと言いますか！」

全く、この事務所の人はみんなそうなのかと勘繰ってしまふぞ。

「山上君が……？」

俺の言葉が意外だったのか、麗さんはキョトンとした表情を浮かべている。

「そうです！熱海に行ったときにも山上さんに同じことを言われました」

「……そうか、山上君がかあ」

そう言つて笑う麗さんはどことなく嬉しそふだった。

おつと、つてまさかそういうことですか……？

「……それにしても、相沢君、熱海でもうちの妹を泣かせたのか？」

「違いますよ！その時はちよつと気まずい雰囲気になりました……」

「何、気まずい雰囲気？まあ、妹はちよつと奥手なところがあるからなあ。意図したことと違う言葉を口にしてしまつていたのなら申し訳ない」

そう言つて麗さんはちよこんと頭を下げる。

「い、いえ！違います！ちよつと二人の中で行き違いがあつたといふかなんといふか……」

我ながら随分と齒切れの悪い……。

「ふむ……。どうだろう、私にも話を聞かせて貰えないだろうか」

俺の台詞に一つ小さく頷くと麗さんは俺たちの向かい側の椅子へと腰を掛けた。

慶ちゃんの方へと視線を向けると彼女は小さく頷く。それを俺は了承の意味だと捉

え、ここ数日の出来事を麗さんへと話すのだった。

「……なるほどな。慶はこれについてどう思っているんだ？」

「うえ、私!？」

突然話を振られ慶ちゃんは今までに聞いたことも無いような声を上げる。

「そうだ、慶自身はこの問題をどう考えてるんだ？」

姉の言葉を反芻するように小さく間を開けると慶ちゃんは拙いながらも言葉を発し始める。

「私は……その、菜々さん自身の問題だと思うし、他の人がどうこうっていうのはどうなんだろうって思ったりしてる……かな」

「なるほどな」

麗さんは慶ちゃんの言葉に小さく頷くとふと視線を近く窓の外へと移した。

「正直な、安部のことはなんとかしてやりたいと私自身も思っていたんだけどな……。恥ずかしながら他のアイドルたちのことで手一杯でどうしようもなかったんだ。ただでさえ私はレッスンに関わっているアイドルたちが多いからな。一人に構っている時間もない。それに、メンタル面が原因でアイドルの世界を去っていった人間を多く知っている」

「お姉ちゃんにもどうにもできなかつたんだね……」

麗さんの表情はどことなく苦しそうだ。彼女自身もきつと俺たちと同じ気持ちを味

わったのだろうか。

「なあ、慶。トレーナーというのはどういう仕事だと思う？」

「トレーナー？」

「ああ、今実際にこの事務所で仕事をして、慶自身が感じていることを話してくれるだけでいい」

慶ちゃんは小さく唸るとぽつりぽつりと言葉を漏らしていく。

「えっと、アイドルのレッスンのサポートをして……、振り付けとか考えたり……。たまに演出とかも打ち合わせして……。うーん、こんな感じ？」

「分かった。それじゃあ相沢君」

「は、はい！」

今度は俺の方が。

「相沢君はプロデューサーとはどんな仕事だと思う？」

なるほど、俺の方はプロデューサーという仕事についてか……。俺は元々のイメージとここ数日の山上さんの姿を思い返す。

「そうですね、アイドルのプロデューサーですから……。仕事の営業をしたり、アイドルのスケジュールを調整したり、それと舞台演出を考えたりとかですかね……」

どうだろう、確かこんな感じだと思うけど……。

「なるほどな。二人とも間違いではない」

「そ、そうですか」

「だけど、正解でもないな」

「一体どういうことですか？」

「お姉ちゃん、何が足りないの？」

ふむ、と一つ唸ると麗さんはTシャツからスラリと伸びた両手を胸の前で組んだ。

「そうだな、二人ともに足りていないのは、アイドルを作っていくことだ」

「アイドルを作っていく？」

俺と慶ちゃんの声が重なる。

作る……ってどういうことだ？

「アイドルは一人ではアイドルにならない。これは私の考えだが私はそう思っている」

「一人ではアイドルにならない……」

「そうだ、アイドルには応援してくれるファンが必要だ。それと同じくらいに舞台を作り上げていく仲間が必要になる。一人で売り込みをやって、曲やフリを考えて、演出もやって、舞台装置も動かして、なんてアイドルはこの世に存在しない。全てのアイドルたちがいるんな人たちに支えられて舞台の上に立つことが出来る。そのいろんな人たちの中にトレーナーもプロデューサーも居るんだ」

一人では……アイドルになれない。そうすると今一人ぼっちで立ち止まっている菜々さんは……。

「誰かの代わりになんてなることは誰にだってできない。けどな、それぞれの形で誰かに寄り添うことは誰にだってできる。これは君たちへの試練であり私からのお願いだ」

そういうと先ほどとは比べ物にならないくらい改まった姿勢で麗さんは俺と慶ちゃんに頭を下げた。

「どうか安部を、もう一度アイドルにしてやってくれないだろうか」

人は誰かの代わりにはなれない。だけれども、もし俺が何かになれるのであれば……。

「麗さん、俺に出来るでしょうか？」

正直怖い。

「相沢君、人生は案外シンプルだぞ。出来る出来ないなんて選択肢はそれをやる本人には関係ない。当の本人にあるのは、やるかやらないかの2択だけだ」

この怖さは、何もないことに怯えている時の怖さじゃない。何かに立ち向かおうとするときの怖さなんだろう。

「相沢さん」

ふと、隣の慶ちゃんの声が聞こえた。

「私はなりたいです……。何かに。自分にしかなれない、何かに」

「慶ちゃんとなら、頑張れるような気がするよ」

俺の言葉に一つ、嬉しそうに頷くと彼女は嬉しそうに笑った。

「ありがとう。どうやってこの問題に立ち向かっていくかは君たちに一任する。山上君には私から話しておくよ。何かあったら私も出来るだけ力になる。よろしく頼む。それでは」

俺たちのやり取りを笑顔で見終えると、麗さんはそれだけ言い残しその場を後にしてしまった。よくよく考えたら人一人の人生を任せられたような気がする。これからどうなっていくんだろう。答えの見えないそれに、どうやって立ち向かっていくんだろう。

そんな俺の不安を、突然の温もりが溶かしていった。

突然のことに驚いて慶ちゃんの方を見ると、彼女の手が俺の手に重ねられていた。ああ、女の子の手ってこんなに柔らかかったつけなあ……。じゃなくて、突然何をなさってるんですかね!?

「あ、あの……慶ちゃん?」

「頑張りましたよね」

「お、おう……」

じゃなくてですね……。

「そういえば」

ふと、慶ちゃんが手を小さく顎に当てながら何やら尋ねてくる。その際に重なり合っていた手が離れてしまったけど、別に名残惜しいなんて思っていないんだからねっ！

「ど、どしたの？」

「お姉ちゃんが来る前に私が聞いたことなんですけど……」

えっと、なんだっけ、確か……。

「俺がどうして菜々さんの力になりたいか、だっけか」

「ですです」

人は誰かの代わりにはなれない。だけど、何かにはなれる。

「俺には何もなかったから、何かがある人の力になりたかったんだよ」

「何かがある人の力？」

なるようになる。だけど、どうなって欲しいかなんて今までずっと見えなかった。

「何かを形にしようとしている人の何かになれること。それが俺の何かなのかなって」

「……ややこしいですね」

「自分でもそう思うよ」

行きたい方向へと向かった先で、俺は何かになれるのだろうか。

た。
手を伸ばそうとしているその先で、その何かの輪郭がうっすらと見えたような気がし

焦がれる歌姫の偶像

熱海の撮影会から戻ってきて数日が経った日の午後、俺は段ボールに山盛りになって
いる資料を棚へと戻す作業に勤しみながら、菜々さんとの何気ないやり取りを楽しんで
いた。

「それですね、ゼミの後輩の大木がそこで言うんですよ。先輩、俺もつとすごいもの見
たことがありますよって」

「えっ、道端に放置されているイルカの魚拓よりすごい物って何なんですか」

山上さんからこの仕事を指示されてから既に時計の長針が3回ほどてっぺんを指し
たが、近くに置かれている段ボールの中には未だに山盛りになったそれが置かれてお
り、無くなりそうにはない。

昼過ぎに事務所に戻ってきた菜々さんが慌てて手伝ってくれているのだがこれ、いつ
になったら終わるのだろうか。

「いやあ、それが実はですね、虹色に光る……」

俺が話のオチを自慢げに菜々さんに話そうとしたその時だった。

「まだやってる感じかい？」

「あ、山上さん、戻られたんですね」

「いやあ、聞いてくれよ。営業先の担当がまためんどくさい人できあ」

肩に背負っていたスーツの上着を近くのソファへと投げ捨てるように置くと、そのままそのソファにうつ伏せで沈み込む山上さん。

「あの、相沢君話のオチは……」

「何かお茶でも持つてきましようか？」

「それはありがたいな。確か昨日夕美が冷蔵庫に麦茶を作ってたはずだと思う」

「あの、話のオチ……」

「で、掃除終わりそう？」

俺は冷蔵庫の中からプラスチック製の容器に入った麦茶を取り出しながら先ほどまで格闘していた資料の山へと視線を送る。

「あの、虹色の……」

「いやあ、大変ですよ。夕方までに終わるかどうか……」

「だよなあ……。急でごめんな。営業2課の連中が急に必要なものがあるって騒ぎだしてさあ」

「そんな事情があつたんですね……」

「だから虹色ですね……」

「ま、気長にやってくれ。今日は他にやることもないから」

「ありがとうございます。分かりました」

冷蔵庫でキンキンに冷やされたそれをもって山上さんの元へと向かう。

「せっかくだし相沢君も少し休みな。今日は他に仕事ないし」

「ありがとうございます」

俺は山上さんに先ほどの麦茶を手渡すと、自分の分の麦茶を取りに再び給湯室へと足を向ける。

「だあかあらあ!!!」

そんな折、急に菜々さんが雄叫びを上げる。

「びっくりしたあ!」

「急にどうしたんですか菜々さん!」

握っていたコップを落としそうになって慌てる俺。見れば先ほどソファに寝転がっていた山上さんも跳ねるように飛び起きていた。

「虹色に光る何なんですかああああああ。このままじゃ一日3時間しか眠れませんかよっ

!」

「お肌が悪そうですね」

「そういう問題じゃなああああいい!!!」

それだけ叫ぶと菜々さんは部屋の扉を勢いよく開け放つとそのままだこかへと立ち去ってしまった。

「……菜々ちゃんどうしたんだ……？」

「……えっと、多分……」

先ほどの会話を思い出しながら俺は山上さんに一連の流れを説明する。

「で、その大木君が見た虹色に光るものってなんだったんだ……？」

「ああ、虹色に光ってるようにみえるただのカナブンでしたっていうオチです」

「うわ、くだらないな。菜々ちゃん今日の夜それで寝られないのかよ」

「……なんか罪悪感湧いてきました」

「戻ってきたらなんか一言言つといてあげな」

「はい」

それだけ言うとう上山さんは机の上へと何やら資料を広げだした。

「新しい仕事ですか？」

「ああ、今度のライブの資料だよ。大体のことは決まってるんだけどまだ詳細が煮詰まってなくてね」

「大変ですね……。そういえば、ライブって行った記憶あんまりないんですねえ。せいぜいが大学の友人のライブぐらいで」

「あらまあ。そのライブの規模は？」

俺は4月に増田が下北沢でやったライブの会場を思い浮かべる。半ばチケットを押し付けられるようにして行ったそれだったが案外楽しかったのを覚えている。

あの時の規模が確か……。

「300人も入らないって友人は言っていましたね」

そう言っていた増田とは相変わらず最近連絡が取れないことが多い。バイトが忙しいのか、それともまたどこかで放浪しているのか……。

「なるほどねえ。ってことは何千、何万ってライブは経験ない？」

「恥ずかしながら全くないですね」

「なるほどねえ。じゃあ……」

そういつて山上さんは立ち上がると棚から一本のDVDを手渡してくる。

「何ですかこれ」

「2年前にうちが出したライブのDVD。事務所の大型ライブの時の映像だよ。後学のためにせっかくだから見るといいよ。つとごめん、電話だ。はい、お世話になっております、山上です。はい、その節はお世話になりました……」

受け取ったそれには、俺でも見知った346プロダクションの顔ともいえるアイドルたちの顔写真がたくさん写っており、まさに事務所の集大成ともいえるパッケージデザ

インだった。

「あ、高垣さんだ」

そのパツケージには今よりもちよつとだけ幼い高垣さんが写っており、その綺麗な横顔に一瞬見入ってしまいそうになった。

「はい、今からですか？ はい、すぐに伺います……。いえ、とんでもございません。では、後程……はい、失礼いたします」

そんな俺を他所に山上さんは適度に電話を打ち切ると先ほど投げ捨てたスーツの袖に再び腕を通している。

「ちよつとまた出てくる」

「あ、わかりました。ちなみにどちらへ？」

「TVK。今度のライブのスポンサーなんだよ」

「あーなるほど」

テレビ関東（通称：TVK）。関東圏を中心に全国にいくつものキー局を持つ日本でも屈指の放送局だ。さすがが一流事務所。スポンサーのネームバリューもトップクラス。

「戻ってこられますか？」

「あー、打ち合わせの後多分飲みに行くだろうから直帰になるかな」

「大変ですね……」

「ほんとな。酒ぐらいゆつくり飲ませてくれって感じだよ。まあ、これが仕事だからしょうがないんだけどね。相沢君も適当なところで切り上げてくれていいからな。それじゃあ行つてくる」

そう言うのと先ほど菜々さんのせいで開けっ放しになっている扉から山上さんは姿を消した。

さて、俺も休憩はここまでにして再びあの資料の山に取り掛かるとしますか。

「終わったああ!!」

資料の山と再び格闘すること4時間。見れば時計の針は6時を回ったところだ。

西からの日差しがずっと差し込んでいたからか随分と時間を勘違いしていたようだ。夏の太陽は顔を出している時間が長いからな。

「んんっ」

ぐつと背伸びを一つすると凝り固まった背中の筋肉が一気に伸びていく感覚を味わう。

何と言うか、最近この事務所のおかげか体を動かす機会が増えた気がするな。

「晩飯、どうすっかなあ……」

山上さんは上がっていいと言っていたもののこのまま帰っちゃうのもなんか忍びない。

俺は部屋入り口のタイムカードに自分の身分証を晒すと今日の仕事をここまでとした。

この前知った話だが、この機械はどうも入り口の入退社用の機械と連動しているらしく、ここでもかざすと一階の会社入り口に設置されている機械の方へと情報も送られるらしい。

実際切らなきやそのままずっと残業代が加算されるのだろうけどそれだと流石に問題になるかもだからちゃんと思えないうちに切っておいた方が無難というか安全だろう。

「ラーメンとか食いてえな」

俺は自分の荷物からスマートフォンを取り出すとこの辺のラーメン屋を探すことにする。あー、家系いいなあ……。ん、こっちの味噌ラーメンも気になる。おー、つけ麺って選択肢もあるのか。

この346プロダクションは渋谷駅から徒歩で10分。周りにはオフィス街と都内でも有数の大学があるために飲食店も多い。

晩飯に困るなんてことはないと思うが……。

「失礼いたします〜」

そんな時だった。俺の思考を遮る様に第3営業課の入り口から呑気な声が聞こえて来た。

「誰かいませんかあ〜。つて相沢君だあ」

「た、高垣さん!？」

そこに居たのは一人の美女。至近距離でないと気づかない程度の綺麗なオツドアイがこちらを見つめている。なぜ近づかないと確認できない目の色を俺が確認できるかというところ……。

「高垣さん、近いです……」

鼻先が触れそうな距離で彼女がこちらを見つめているからに他ならない。

「ど、どうしたんですか今日は」

「お弁当」

お、お弁当……? そう言っただけで彼女は目の前にいかにも自分は高いですよとその見た目からびんびんに主張している二つの弁当箱を俺の目の前に差し出した。

「今日の撮影で余ったので山上さんにでもと思って貰ってきたんです」

そう言っただけで彼女は嬉しそうに笑いながらソファへと腰を掛けた。

「でも、この様子じゃない見たいですねえ」

あー、そういえば山上さん今日は戻らないって言ってたな。

「午後にスポンサーと打ち合わせをするって出て行ってそれつきりです。今日は直帰するかもとおっしゃってました」

「あら、それは残念……」

そう言つて落ち込む高垣さんは俺史上一番残念を顔に出しているのではないかというくらい凹みようを見せている。悪いことをしている訳ではないのに事実を伝えてしまったことに若干の罪悪感が沸いてしまう程だ。

「あらっ？」

コロコロと表情の変わる彼女の手には俺が昼間に山上さんから受け取ったDVDが握られている。そういえば机の上に置きっぱなしにしてたな。借り物をそんなところに置いておくんなんて、反省せねば。

「また懐かしいDVDですね」

「山上さんに借りたんです。俺が大きなライブに行ったことが無いって話をしたら貸してくれました」

「あら、そうなんですか。それなら」

そう言つて高垣さんは徐にパッケージから中身を取り出すとテレビに備え付けられ

ているデツキへとそれを流れるように入れる。

「せっかくなので、一緒に見ませんか？」

こうして俺は夕食時にトップアイドル高垣楓と彼女の出演しているDVDを見るというファンがいくら積もうとも味わえない稀有な状況に置かれるのだった。

俺、明日彼女のファンに殺されたりしないだろうか……。

「山上さんに差し上げる予定だったお弁当は相沢君にあげますね」

「そ、それはありがとうございます。夕飯どうしようか迷っていたところだったんです」

「良かったですね。今日のお弁当は菊久のすき焼き弁当なんですよ」

リモコンを器用に操作しながら弁当の蓋を開ける高垣さん。

「わあ！美味しそう！」

嬉しそうにすき焼きを見つめる彼女はクリスマスプレゼントを開けるときの子どもみたいな表情を浮かべている。本当にココロと表情が変わる人だ。何と言うか、見て飽きない。

テレビや雑誌などではクールな印象しか持ってなかったけれどこれが彼女の本当の姿って奴なんだろうか。

「ほら、相沢君もどうぞ」

そう言って弁当を差し出してくる彼女の手とは反対の手にはいつの間にか缶ビール

が握られている。

「どこから出したんですかそれ!？」

「……乙女の秘密ですっ」

可愛く言っても許されるわけじゃないですからね。後ここ事務所の中です。

「こんなところで飲んで大丈夫ですか？」

「心配ないですよ。私と志乃さん、早苗さん辺りはよく怒られていますし」

「それじゃあダメじゃないですか!」

「そんなプリンプリンしたらお弁当が美味しくなくなってしまうですよ」

「……まあ、これ以上言うのは何とと言うか野暮ですね。それじゃあいただきます。

……って何だこれっうつまっ」

割り下がしつかりと沁み込んだ牛肉は俺が今まで食べたすき焼きのどれよりもおいしかった。撮影で貰ってきたと口にしていたからってつきり冷たくなって美味しくなくなってるものだと思っていたけれど、これはこれは……。

「ちなみにそのお弁当、3200円らしいですよ。私も滅多に食べられないので嬉しいです」

「さんぜっ、ごほっ」

なんだその値段っ!?

「なんでも三重県の有名なお肉を使用しているとか……」

本当に松坂牛です。ありがとうございます。

「今日の撮影のスポンサーさんをご用意してくださったのですが、何と云うか三重だけに見栄つ張りだったんでしようか？」

「……アルコール回るの早くないですか？」

「平常運転です。ほら、始まりましたよ」

気づけばテレビには開演前の薄暗い薄暗い場内が映し出されている。

「東武ドームでしたっけ？」

「はい、私は初めてのドームだったので緊張しましたあ」

「東武ドームってキャパいくらでしたっけ」

「35000人ぐらいですねえ」

35000……。そんな人数の前で歌って踊るってどんな気分なんだろうか。

高垣さんと手探りの会話を続けている傍ら、映像はだんだんと進んでいく。

気づけばもう1時間は経とうという頃だろうか。

「あ、次私の出番ですよ！」

嬉しそうに笑う高垣さん。それと共に52インチの特大大モニターからはテレビで何度も耳にしたことのあるイントロが流れ出した。

「私も若いですねえ」

「今じやもう歌姫ですからねえ」

「歌姫ですか」

先ほどまでニコニコしていた高垣さんの表情が一瞬だけ固まったような気がした。気のせいだろうか。それとも、歌姫という世間からの評価に思うところがあるのだろうか。

「その名前は何と言うか、重すぎるかもしれないね。彼女を見てるとそう思います」
どこかドキッとさせる憂いを帯びた表情を浮かべる高垣さんから慌てて視線をテレビに戻すと、そこには俺がここ最近で見慣れてしまった顔がステージの上に立っていた。

「菜々さん……?」

「このDVDは、彼女が最後にステージに立った時の映像ですよ」

……そういえば麗さんが山上さんに話をしておくんて言ってたような気がするな。もしかしてこれを貸してくれたのは山上さんに何らかの意図があったのだろうか。

「菜々さん、楽しそうですね」

「ええ、彼女と、そして彼が勝ち取った舞台ですもの」

彼、そう高垣さんが表現した人物こそ、菜々さんの元プロデューサー。

「高垣さんは……」

「楓」

「えっ?」

「菜々さんって呼ぶのなら、私もそう名前で呼んでほしいです」

んなつ、いやいやいや、急に何を言い出すのでしょうかこの人は。夕美ちゃんや慶ちゃんを名前で呼ぶのとはこちらら大違いやぞっ!?

「えっと、それは……」

「ダメ、ですか……?」

何て言われて断ることのできる奴がいたらそいつは一回死んだ方がいい。

「呼ばせていただきます、楓さん」

「よろしいっ」

そう言つて彼女は嬉しそうに笑つた。

「それで、相沢君は何を言おうとしてたんですか?」

「えっと、楓さんは、もう一度菜々さんにステージに立つて欲しいんですか?」

「もちろんです。彼女の姿は私の憧れですから」

意外な言葉が出てきた。『歌姫』高垣楓の口から、菜々さんが憧れだと。こう言つては申し訳ないけど、菜々さんと楓さんは全くと言つていい程方向性が大違いだ。

「憧れ、ですか……?」

「ええ。歌姫高垣楓はみんなが作り上げた偶像なんです。でも、本当の私はこうしてビールを片手に親父ギャグを口にするのが大好きなただの普通の女性ですから」

そう言って楓さんは寂しそうに笑う。

「菜々さんは違うと?」

「違う、という用語弊があるかもしれません。あ、用語弊と言えば五平餅ってご存知ですか」

「話が脱線してます」

「あ、ごめんなさい、ついつい」

「それで、菜々さんが違うって言うのは?」

「彼女は自分になりたいものを精一杯自分という偶像に投影しようとしています。他人から作られていった私とは違う。その偶像には、安部菜々という一人の人間の生き様が宿っているんです。それが、私が彼女が憧れる理由です」

生き様。

その言葉が俺の中にズシリと心に沈み込むような音を立てた。

それを言うのなら、そんな楓さんだつて……。

「他人から作られたなんて悲しいことを言わないでください」

「でも、私にはなりたくないものなんて……」

「なりたくないものなんて、無くていいんじゃないですか？」

「えっ？」

本当にやりたいことが明確な人間ってのはそう多くはない。周りに、そして自分に騙し騙しの誤魔化しを精一杯に押し付けながら生きているもの。これは山上さんの言葉だ。でも、そんながむしやらの生活の中で、もしそこに僅かでもある真実に手を伸ばすことが出来たのなら……。

「俺は、さっきのステージの上で笑っている楓さんは、心から楽しそうだった気がします。それが楓さんが本当に楽しいと思ってるのだったら、それは楓さんがステージの上で表現をしようと思っただ高垣楓の姿なんじゃないでしょうか。あなたの想いは、ちゃんと高垣楓に宿っていると俺は思いますよ」

それは、楓さんが見つけた生き様だと思うから。

「相沢君……」

「あ、えっと、すいませんっ！楓さんなんか偉そうな口を利いてしまっつて！」

俺はトップアイドルに向かってなんてことを口走ってるんだ。

「いえ、嬉しかったですよ」

「え、あ、えっと……？」

「柄にもなく愚痴なんて口にしてしまったので、そう言ってもらえて嬉しかったです」
「何と言うか、それは良かったです」

「みんなが作り上げたなんて先ほどは表現しましたけど、訂正しますね。私は、みんなに作ってもらっているんですね。後はそれを、私が私らしく楽しんでいけばいい」

「素敵な考え方だと、思います」

「ありがとうございます。そうなるよりも一層……」

楓さんの見つめる先、そこには楽しそうにステージの上で歌いながら他のメンバーと掛け合いを行う菜々さんの姿があった。

「ステージに立って欲しいですね」

「ええ、俺も実際に菜々さんのステージを見て思いました。菜々さんは、最高にカッコいいアイドルだって」

「だからこそ改めて思う。俺は出来るだろうか。彼女にもう一度ステージに立つてもらうことが。」

彼女の生き様を、もう一度その舞台の上に灯すことが出来るのだろうか。

魔法使いは魅せられて

楓さんと二人っきりの夕食を終えた日の翌日、俺は眠気眼を精一杯に擦りながら今日も今日とて事務所内の掃除に励んでいた。

「なんか眠そうだな、相沢君」

「す、すみません」

俺のバイト先の上司である山上さんは、机の上の資料を自らの鞆へと仕舞い込みながらこちらを一瞥して見せた。

「体調悪いとかだったら早めに行ってくださいよ」

「いえ、そういうのじゃないんですけど……」

「なんかあつたのかい？」

「あつたというかなんというか……」

俺は一瞬口ごもつてしまう。この心の中のものもやもやを上手く言葉にできる自信がなかったからだ。

「そういえば昨日、ライブのDVDを貸していただいたじゃないですか」

そう思った俺はジャブ程度の会話から上手く自分の思いを言葉にできないかと探つ

ていくことにした。山上さんなら、俺の気持ちも上手く汲んでくれるかもしれない。

「あれな、ちゃんと観たかい？」

「観たというかなんというか……」

「さつきからはつきりしないなあ。聞いてる側からすると不安でしようがないぞ。プロデューサーたるもの、自分の発言には自信が無くても自信があるように見せねば」

「あの、自分プロデューサーじゃないんですけど……」

「そりゃ失敬した。で、DVD絡みの話？」

「はい、その、つい、観すぎちゃったんですよね……」

自分で口にしてもなんともはつきりしない話である。本質にたどり着くまでに長い話になりそうだ。

「そんなに面白かったか？」

「ええ、広い会場に豪華なセット、出演アイドルたちのパフォーマンスも素敵で楽しかったです」

「で、君はそのステージを何度も見返してたから寝不足な訳か」

この歳になって睡眠時間の管理もできないとは何とも情けない話だ。

「だけど」

ふと山上さんの声が鋭くなった気配を感じる。

「君がそこまでそのステージに入れ込んだのは、ただ面白かったってだけじゃないんだらう?」

不敵。まさにその言葉がぴったりなほどの笑みに俺は思わず心の中で精一杯の両手を挙げた。全く、この人はどこまで俺のことを見透かすのだろうか。

「バレてますか?」

「完全に、とは言い難いけどね」

やっぱりこの人には敵いそうにない。それと同時にこの人なら俺のこの気持ちをとるか代弁してくれるのではないだろうかという思いを抱く。持つべきものは、やっぱり頼りになる年上だ。

「昨日、仕事終わりに実はここで一度ライブのDVDを見たんです。それからというのも、帰宅途中も、家に帰ってからも、あの時の映像が頭から離れませんでした。だから、何度も何度も自宅ですれを……」

「君も魅せられてしまったのかもね」

「は、魅せられて……?」

「シンデレラの話は知ってるかい?」

「ええ、おとぎ話ですよ。シンデレラという少女が魔法使いの魔法に掛けられてお城の舞踏会に出かけるとそこで王子様と懇意になるとかい」

「ああ、俺たちプロデューサーはね、魔法使いなんだよ」

「魔法使い？」

「そうだ。少女に魔法をかけて、ステージという舞台に導くその魔法使いの役さ」

「それが魅せられた話とどう繋がるんです？」

今の話からするとどちらかという魔法に魅せられているのはシンデレラの方では？

「さあ、それは自分で考えてみたほうが面白いかもしれないぞ。果たして、その魅力に惹かれてしまったのはいったいどちらなのだろうか。さて、俺は取引先との打ち合わせがあるからそっちに出かけるかな」

「戻ってこられます？」

「うんにゃ。今日も多分直帰になる。あ、そうだ。加奈があと1時間ぐらいで戻ってくると思う」

「加奈？」

「今井加奈だよ。自分の部署の所属アイドルぐらい覚えておいてくれ。この前熱海でも一緒だっただろう？」

「あ、今井ちゃんのことですか！」

「今井ちゃんって呼んでるの相沢君ぐらいだよ……」

「そ、そうですか」

「今雑誌の取材でちよつと出てるから戻ってきたら今日はもう上がっていいって俺が言つてたつて伝えてくれないか？」

「それぐらいなら大丈夫です」

「よろしく頼む。もしかしたら夕美と文香も来るかもだからその時は同じこと言つてくれ。それじゃあ行つてくる」

そう言うと山上さんはパンパンに膨らんだ鞆を片手にその場を後にしてしまった。何と言うか、熱海から戻つてきてからずっと忙しそうだな。

それにしても……。

「魅せられた、かぁ」

思い出すのは先ほどのやり取り。少女に魔法をかけた魔法使い。それがアイドルに憧れる少女をプロデュースするという考え方なのであれば魔法に魅せられたのはシンデレラの方ではないのか。それなのになぜ山上さんは俺に対して魅せられたなんて言葉を使ったのか……。

俺の心の中のもやもやは先ほどよりも更に濃いものになっていったような気がした。

「ただいま戻りましたー!」

山上さんとのやり取りから1時間ほど経っただろうか。俺が一人パソコンに向かって頼まれていた資料の入力作業に勤しんでいたその時、人一倍明るい声が事務所内に響き渡った。

「あ、今井ちゃん。おかえりなさい」

「相沢さん。お疲れ様です」

夏にぴつたりな爽やかな水色の肩出しのワンピースに身を包んだ今井ちゃんは手に持っていた小さな可愛らしいショルダーバッグをソファの上に置くとそのまま給湯室の方へと向かっていった。

「相沢さん、麦茶飲みます?」

ふと、給湯室の方から今井ちゃんはちよこんと顔だけ覗かせてこちらを見つめている。なんとというか、小動物感があつて可愛いな。俺にもし妹が居たとしたらこんな子が良かった。まあ、うちは男兄弟。親ももういい歳だから地球がひっくり返ってもそんなことはありえないんだろうけど。

「相沢さん?」

「あ、悪い。せつかください貰おうかな」

「わかりました!」

そう言つて彼女は二人分のグラスを抱えてこちらへと戻つてきた。

「えつと、相沢さん？」

「ん、どしたの？」

さつきから随分と名前を呼ばれているもんだ。

「せつかくなのでこちらで一休みと行きませんか？」

時計をちらとみるともう午後3時を回っている。せつかくだしお言葉に甘えてみようか。

「そうだね。麦茶ありがとう」

「いいえいえつ」

彼女の向かい側に腰を下ろすと俺はグラスに手を伸ばしそれを一気に半分ほど煽る。冷房の効いている室内とはいえ今日は猛暑日一步手前の暑さだ。火照つた体に冷たい麦茶が一気に染み渡つていく。

「……」

「……」

「……」

「……あの」

ふと、机を挟んだ向こう側の今井ちゃんが恐る恐るこちらに声を掛けてきた。

「どうかした？」

「いえ、そういえばこうして相沢さんとお話する機会って今までなかったなって」

「あーそういえば」

俺がこの事務所で働きだしてからそろそろ2週間が経とうとしている。が、彼女の言う通り改めてこうして面と向かって話をするのは今日が初めてかもしれない。

熱海の時も殆ど雑用ばかりだったしなあ……。

「今井ちゃんも雑誌とかの取材で忙しいみたいだしね」

「あー、それでですね、相沢さんにお願いがあるんです！」

机にほぼ乗り上げながら彼女は突然こちらに顔を突き出してきた。

「い、今井ちゃん……近いつ」

「ご、ごごごめんなさいっ」

慌てて彼女は元の位置へと腰を下ろすと照れ臭そうに髪をかき上げる。いちいち忙しい子だなあ。まあ、そこも彼女のいいところなんだろう。ネットでもそういう書き込みをよく見かける。

「それで、お願いってのは？」

「名前ですよ名前っ！」

「名前？」

「そうですよっ！今井ちゃんって呼び方はよろしくないと思いますっ！」

え、俺、なんか彼女が気を悪くするような呼び方をしてたろうか……？というかぷくつと膨らませた顔がなんだか小学校の時にクラスで飼ってたハムスターを思い出す。

「なんか悪いこと言っちゃってた？」

「いえ、そうじゃないんですよっ、そうじゃ。でも、何と言うか羨ましいなあって思っ……」

「羨ましい？」

「ええ、夕美さんのこと、相沢さんは名前で呼んでるじゃないですか」

「あー、まあ。でも、あれは出会った直後にそう呼んでほしいって本人から要望があつて……」

「じゃあ要望したら呼んでくれるってことですね！」

ニツコリという効果音が今にも聞こえてきそうな満面の笑み。これはつまり……。

「呼べってこと？」

「はいっ！夕美さんばかりズルいです」

「ズルいってどういうことだよ……」

「私だつて呼ばれたいですもん。なんか心の距離？みたいな感じてやだなーって」

「それはなんか申し訳ない」

「それに、夕美さんすごく嬉しそうに話すんですよ？私と文香さんどういうリアクションをすればいいのか……」

「それ、俺は悪くないだろ」

「でも、ズルいので」

まったく、表情がコロコロと変わるなあ。

「じゃあ、加奈ちゃん」

「はいっ！」

屈託のない透き通った笑顔。これが彼女の一番の魅力なんだろう。等身大の女の子が、等身大の自分で精一杯頑張っている。その姿に多くのファンが心惹かれている。

「そういうえば、加奈ちゃんはアイドルになってから長いの？」

名前の下りもひと段落ついただろうから俺は世間話程度に話を振ってみることにした。彼女のこと、ネットで情報を漁ってみたもののそれ以上のことは何も知らないからな。

「そうですよ。もう1年ぐらいでしょうか」

「そうなるかと夕美ちゃんよりもずっと先輩だな」

「歴的にはそうなりますね。でも、夕美さんは頼れるお姉さんって感じですよ。宿題とか教えてくれますし」

「そうか、頼りになるんだな」

「まあ、勉強に関しては何香さんの方がよっぽど頼りになりますけどね……あはは」

「それ、本人には言わないように……」

「もちろんです」

そう言つて手帳とスマホを机の上へと置きながら彼女は苦笑いを浮かべる。

「ここに入ったきつかけはオーデイション？」

「いえ、山上プロデューサーからのスカウトです。たまたま私が街で迷つた時に声を掛けたのが山上さんで……。後日お礼を言いに行つたらそこでスカウトを受けたんです。でも、未だに上手く飲み込めてないんですよねえ」

そう言つて彼女は机の上の手帳へと手を伸ばすとそれをばらばらとめくりながら疑問の声を上げた。

「飲み込めてないっていったい何が？」

「私がスカウトされた理由です」

そんなに加奈ちゃん自身にスカウトされるだけの魅力があつて……。魅力。魅かれるものかあ……。

「山上さんは何て？」

「私が平凡な子だから……つて」

「平凡な子?」

「はい、私、田舎から出てきたんですけど、ずっとアイドルとか都会の可愛い女の子に憧れてて。こんな私のどこが良かったんだらうってメモには書いてあります」

「メモ?」

「はいっ! 私メモを取るのが癖みたいなのがあります…。このメモのスカウトされた日のところにどうしてこんな私をスカウトしたんだらうって昔の私が書いてました。今も、気持ちはあまり変わってません。あ、別にアイドルが嫌とかじゃないんですよ! プロデューサーは優しいですし、お仕事は常に新しいことばかりで新鮮ですし、皆さん優しいし、沢山可愛い衣装も着れますし…。私自身も、少しは可愛くなれたかなって」

照れくさそうにぎゅっとメモ帳を握りしめて笑う加奈ちゃん。その表情を見ていると山上さんがどうして彼女に声を掛けたのか何となくその理由が分かったような気がした。

そうか、山上さんは魅せられたのかもしれない。可愛さに憧れる彼女に。だからそんな彼女に魔法を掛けようとした。

彼女がその憧れに近づけるように、彼女が今よりも輝けるように。

「山上さんは、きつと加奈ちゃんのそんな真つすぐさに魅かれたんだと思うよ。可愛さ

に憧れる、等身大の女の子に」

「……相沢さん……」

ふと彼女と目が合う。数秒の沈黙の後、加奈ちゃんは先ほどまでの満面の笑みではなく、ただ小さくそつと微笑んだ。その瞬間、俺もきつと魅せられたんだろう。今井加奈という魔法に。

「ああー!!」

一瞬が数分にも数時間にも感じられたかのようなその時間を破ったのは事務所の入り口から聞こえてきた聞き慣れた声だった。

「文香ちゃんどうしよお。相沢さんが加奈ちゃんを口説いてるよお」

「これは……山上さんへ連絡をしなければ」

そこに居たのは、夕美ちゃんと驚沢さんだった。

「違う違う誤解だつて! だからそれは本当にやめてくださいお願いしますっ!!」

そんなことされた日にや一発で退職案件です。実入りのいいこの仕事を簡単に手放すわけにはいかんのですっ!

それに、それに……菜々さんの件だつてまだ解決してない。

「つて冗談だよ、相沢さん」

「もう、心臓に悪いからやめてくれ。それと、二人ともおはよう」

「おはようございますー！」

「おはようございます」

明るく手を振る夕美ちゃんとは対照的に鷺沢さんは小さくぺこりと頭を下げた。

「ん、なんかうれしそうだね、相沢さん」

「そうか？」

そんなつもりはなかったけれど、確かに今の俺は笑っているのだろう。心の中のもやもやが少し晴れたような気がしたからだ。

俺は昨日魅せられてしまったのだろう。菜々さんのステージに。きっと彼女の元プロデューサーもそんな姿に魅せられた。知らないはずの誰かの気持ちに少し近づけたような気がして、少し嬉しかったんだ。

きっとおとぎ話の魔法使いも魅せられてしまったのだろう。シンデレラの人柄に。憧れに近づこうとするその懸命なひたむきさに。

「どうしたんですか、相沢さん。さっきとは違ってなんか嬉しそうですけど」

「ん、夕美ちゃんに魅了されてた」

「へ？え、あつ……」

ゆでだこのように顔を真っ赤にしていく夕美ちゃん。可愛い。

「……なんてね」

「ちよつとどういうことですか!?!」

あの日、夕美ちゃんのステージが俺にとってそうだったように。慶ちゃんの目に映るものが、そうだったように。

憧れの囚われ人

「お疲れ様です、相沢さん！」

その日、山上さんの付き添いで向かったレッスルームの一角で、夕美ちゃんはいつものように俺に明るく声を掛けてきた。

「お疲れ夕美ちゃん。暑いから水分補給はこまめにね」

「はい、ありがとうございます！」

普段から夕美ちゃんが愛用している花柄の黄色いスポーツタオルで汗を拭う彼女のそんな仕草を遠巻きに見ながら、俺は山上さんの様子をそつと伺う。

悩んでいるような、それとも何やら企んでいるかのような……。ここ最近の山上さんの姿を思い浮かべながらその表情の裏を読み取ろうとするものの、その答えは至ってシンプルで、俺には分かりそうにない。その一言に尽きるのだった。

「それじゃあ、行つてきますね！」

「ああ、頑張れよ、夕美」

笑顔で夕美ちゃんを送り出す山上さん。明るいその声に見送られながらトレーナーさんの元へと向かう彼女の姿が少しぼやけて見えたのは、きっとレッスンの熱気で温

まったこの部屋が見せた蜃気楼かなんかなんだろう。その時の俺はそうぼんやりと考えていたのであった。

「あ、こんなところでお会いするなんて、なんだか新鮮ですね!」

夕美ちゃんのレッスンを見学してから数日が経った日の午後、俺は346プロ内の食堂とある少女に声を掛けられていた。

「慶ちゃん、お疲れ様。お昼休み?」

「はい、そうです!午前中にLIPPSの皆さんのレッスンに同行して、そして午後からは今度はニュージエネのレッスンに付き合います!」

「な、なかなかハードだね……」

この暑い中に良くそんな頑張るもんだ……。日替わり定食を持つ彼女のお盆の上でこれでもかというほど白米が盛られているのも納得のスケジュールである。

「相沢さんはこの後は?」

「俺?俺はこの後は5時間ほどひたすらに映像を見るだけの作業だよ」

「映像を見るだけ……想像するだけで背筋がゾツとしますっ」

「何、じつとしてるのは性に合わない?」

「はい、全くもってその通りですっ！」

そこで偉そうにされても。

「突っ立ってるのもあれだろ、空いてるから座りなよ」

「それじゃあお供させていただきますね」

「ああ、生憎と一人なものだね」

「……職場で一人で食事をするって、考えると結構ヤバイですよね」

「……気にしていることをそう直接言わないでくれ」

「あつ、これはすみません」

そう言いながら彼女は微塵にも罪悪感を感じさせない笑みを浮かべながら俺の前に座ってくる。

「ほら、美少女と二人で食事出来るんですからいいじゃないですか！」

「自分で言うかねそれ」

「……言った私も恥ずかしくなってきたので何とかしてください」

「それは俺の仕事じゃないだろう」

少し顔を赤く染めた彼女は照れ隠し故か顔程もある大きなエビフライに被り付いていた。なんか、美味しそうにご飯を食べる女性ってくるものがあるな。

「そういえば」

俺が新しい自分の世界への扉をノックしかけていたところに先ほど口いっぱい食事頬張っていたことが嘘だったかのように自然と慶ちゃんがこちらに話しかけてくる。

「どした？」

「先ほどの映像っていうのは、この前の奴ですか？」

「そうそう。この前鷺沢さんが出てた特番の奴ね。山上さんが最近忙しいからってんで俺に仕事を押し付けてきたのよ」

「あー、あれに出られたってことは文香ちゃんもそっち路線になっていくんですかねえ」
「鷺沢さんに限ってそれはないだろう」

「でも、天下のマッスルキヤツスルですよ!？」

「どういう心配だよ……」

まあ、慶ちゃんの心配はあながち間違いではなかったりするのかもしれない……。俺は先週放送分の内容を思い返しながらかつて鷺沢さんの今後を憂う。

それにしても前回は酷かったなあ……。渋谷凜ちゃんのあるなに焦ってる声、初めて聞いたな。

「で、それ見て何するんですか？」

「ああ、鷺沢さんが喋ってるところのタイムコードだけ書き出して欲しいって」

「ああ……つてことはまだ編集始まってすらいらないんですね」

「そうなんだよね、本放送あと10日もないのに」

こういう会話をしていると最近業界に自分が少しづつ染まってきたなって感じさせられる。普段見ているテレビがこんなにかつかつのスケジュールで作られているなんて知らなかったしな。

「で、そのコードを見ながら改めて山上さんが確認すると……」

「そういうこと」

実際に編集するのはテレビ局の人だからこればかりはこつちの都合のいいようにはならないんだろうけど、事務所的にNGなところはきつちり事前に伝えておこうというこことらしい。

それでも使っちゃう局もあるっちゃあるんだろうけど天下の346プロだからなあ。テレビ局も安易に敵には回したくないだろう。

「そういうえば、夕美ちゃんの件聞きました？」

「夕美ちゃんの件？」

慶ちゃんから出た名前であつた俺はふと先日のレストラン見学の件を思い出す。

「ええ、今度セカンドライブに出演するらしいじゃないですか」

「あー、らしいね」

菜々さんに聞いた情報だと、既に夕美ちゃんはデビューライブを終えているらしい。入所時期が近い子数人とともに小さな小劇場に立つたらしい。

俺が初めて会ったときにあんなに緊張していたのはどうやら一人でステージに立つのが初めてだったからということだったみたいだ。

「それで、私も姉のサポートでレッスンに付くことになったんです」

「あれ、でももう準備とかは始まつてるんじゃないの？」

俺がこの話を山上さんから聞いたのはもう10日以上前のことだ。曲の準備とかは既に終わっているもんじゃないのだろうか。今更新しくサポートに付くって付く方も大変なのでは……？

「今回はセトリが慌ただしいので私は主に出演アイドルの補助という形で舞台裏で支えることになるらしいです。レッスンに同行するのは姉が勉強のためって私に気を遣ってくれたというか……」

「期待されてるんだな」

「そうだといいですけどねえ……」

「で、何か上手く行っていないことでもあつたりすんの？」

「こういう時何もできない自分が出来るのはせめて頑張っている人の愚痴を聞いてあげることぐらいだろう。」

「いえ、別に困っていることは……。いや、あつたりなかつたりするかもしれませんが」
「随分歯切れが悪いね」

「すみません。何と言うか、姉から言われたことが分からなくて……」
「姉って言うのと、麗さん？」

思い返すのはこの前初めて会った慶ちゃんが一番上のお姉さん。ストイックの具現化したいなお姉さんだったけれど一体何を言われたんだろうか。

「いえ、麗お姉ちゃんは今回は他の仕事で忙しいみたいで、今回のライブのトレーナー主任は2番目のお姉ちゃんの聖お姉ちゃんです」

「あー、4姉妹みんなトレーナーとして346にいるんだっけ」

「はい、それで聖お姉ちゃんが……」

そう言うって姉の名を口にする慶ちゃん表情には困惑とも焦りとも何とも言えない表情が浮かんでいる。

「アイドルと向き合うなよって」

「アイドルと向き合うな……?」

一体どういうことなんだろうか。サポートとかってその人に向き合ってみて相手を理解することで成立するものじゃないのか？

「一体どういう意味なんだろうって分からないんです……」

これは慶ちゃんの表情も納得だ。正直全然ピンとこない。

「ごめん、それは俺も力にはなれそうにないなあ。でも、その聖さんはベテランのトレーナーなんだろう？」

「はい、聖お姉ちゃんも麗お姉ちゃん程ではないですけど、346で長いことトレーナーをしますので……」

「だったらきつとその言葉には意味があるはずなんだよ」

「ですかねえ……」

こうしてお昼時の雑踏の中、俺と慶ちゃんは二人悶々と頭を悩ませることになるのだった。

「お疲れ様。山上君居るかい？」

慶ちゃんとの昼食を終えた後の午後、宣言通りPCに映し出される動画とひたすらにらめっこをしていた俺の元に、部屋の入り口から呑気な声が聞こえてきた。

「お疲れ様です。うちの山上なら今日はちよつと出ておりましたって……」

「あれ、この前のバイト君！えつと名前が確か……」

大きなカバンを小分けに背負い、その男性はうんうん小さく唸りながらこちらへと歩

いてきた。

「相田君！」

「相沢です。お疲れ様です、吉田さん。熱海以来ですね」

「ああ、相沢君か。そうだね。熱海以来だ」

「山上さんはいないですけどせつかくなのでお茶ぐらい飲んでいってください」

「あーじゃあそうさせてもらおうかなあ」

そう言いながら俺が吉田さんと呼んだ男性は部屋の一角にあるソファに腰を掛けた。

「山上さんに緊急の用事ですか？でしたら連絡入れますけど……」

「いや、急ぎって訳じゃないんだ。この前の写真が出来たからデータでも渡そうかと

思ってたね」

そう言って吉田さんは一本のUSBメモリを手元でプラプラと扱って見せた。

「あー、あの時の写真ですか」

そう、吉田さんは346プロ御用達のカメラマンだ。うちの事務所では写真集等を出版する機会が多く、その度にカメラマンを雇うのも予算の都合や手間がかかる等の理由でこうして最良のカメラマンが何人もいる。

吉田さんは山上さんがプロデューサーを始めてからすぐの知り合いらしく、所謂3課お抱えのカメラマンということらしい。

「もしかして仕事中だった？悪いね」

「いえ、ちょうど休憩でも入れようかと思っていたところなので」

俺は給湯室から2人分の麦茶を取り出すと一つを吉田さんの前に差し出す。

「もしあれでしたらUSBメモリ、俺から山上さんに渡しときましましょうか？」

「あーそうしてくれると嬉しいな。明日から北海道なんだよね」

「また346の仕事ですか？」

「んーん。次は東郷寺」

「吉田さんも大概忙しい人ですね」

「腕がいいからね」

そう言ってニカッと笑う吉田さん。ちよつと軽そうだけど親しみやすい雰囲気における人柄を感じる。年齢は40中盤だとこの前会ったときに言っていたけれど、俺もこういう歳の取り方をしていきたいものだ。

「じゃあ先に渡しとこうかな」

吉田さんから俺の手元に渡されたのは1本のUSBと複数枚の写真だった。

「データだけじゃないんですか？」

「ああ、相田君は知らないんだっけ。これが俺のやり方ってかこだわりなんだよね」

「相沢です。こだわり？」

「そそ。写真集つてさ、実際はデータじゃなくて一冊の本になるわけじゃない。そうなる
と実際に買ってくれた人は手に持つて写真を眺める訳よ。そこに俺はディスプレイ
越しに眺めるだけじゃ伝わらない何かがあるような気がしてさ」

「……なるほど。ん、この写真……」

そんな吉田さんから渡されたこだわりの写真を何の気なしにぺらぺらとめくつてい
ると、雰囲気満載の高垣楓の間に一枚の写真が紛れていることに気づいた。

「これは……」

「いい写真だろう？ まあ、俺の気まぐれで適当にシャッターを切った奴なんだけどさ。
せつかくだと思って」

そこに映っていたのは、白い砂浜で笑顔を浮かべる夕美ちゃんとそれを暖かく見守る
菜々さんの写真だった。

「レンズを向けられていたときのアイドルの表情も好きだけどさ、そういう素の表情も
嫌いじゃないんだよね、俺」

「太陽、みたいですね」

「太陽かあ……いい表現だな。相葉ちゃんだったっけか。初めて撮ったけど確かに太陽みた
いな子だったなあ……彼女は立派なアイドルになるよ。俺の写真がそう言ってる」

流石プロのカメラマン。言うことがカッコいい。

「それで相田君、向日葵の花言葉って知ってるかい？」

「相沢です。確か、貴方だけを見つめる。でしたっけ？」

「それともう一つ。憧れ」

「……憧れ、ですか？」

「ああ、憧れだ。太陽と一緒に動く様はそれに憧れて終始追いかけているように見えるだろう？」

「言われてみればそうですね」

「花が好きな相葉ちゃんが、いつしか花が憧れる存在になる。そう俺は願っているよ」

「太陽のように、ですか」

なるほど、夕美ちゃんがステージの上、沢山のファンに囲まれて光り輝いている様はきつと花畑の上でキラキラと煌めく太陽のようなんだろうな。

「それじゃ俺はそろそろお暇するよ」

「わかりました、確かにUSBメモリと写真は山上さんの方に渡しておきます」

「ああ、頼んだよ」

吉田さんが立ち上がると同時に俺も彼を見送るために席を立つ、その時だった。

重なった写真がばらけその中からまた一枚の写真が俺の目に留まる。

「これは……」

「ああ、その写真か……。名づけるなら、『偶像の囚われ人』」

「菜々さんの……写真ですか？」

そこに映るのは夕日の浜辺、どこまでも寂しそうな顔で沈みゆく夕日を眺める菜々さんだった。

「覚えておいてくれ、相沢君」

「だから相沢です、つてごめんさい、合っていました。それで覚えるつて……？」

吉田さんは小脇に抱えていた鞆を改めて背負いなおすと去り際にポツリと呟いた。

「憧れは、呪いに等しい。だから君がその呪いを解いてくれることを願っているよ」

吉田さんが部屋の扉の向こうへと姿を消した後も、俺はその場に立ち尽くしていた。

『呪い』。その言葉がどこまでも冷たく俺の心の中に沈み込んできたからだ。

「……もうちよつとさあ」

どうして俺の周りの大人は、こうも回りくどい言い方を好むのだろうか。もつと分かりやすく言葉にしてくれてもいいのになあ……。

俺の渾身の心の嘆きは、俺しかいない部屋に小さく響き渡ったのだった。